

第2章 豊明市民を対象とした公共施設に関する意識調査

2.1 アンケート回答者の基本情報

アンケート回答者の属性を見ていく。グラフに書かれた数字は、いずれも回答者数を表している。ただし、無回答または、無効回答は集計に含まないこととする。

アンケート回答者の性別を図 2.1 に示す。

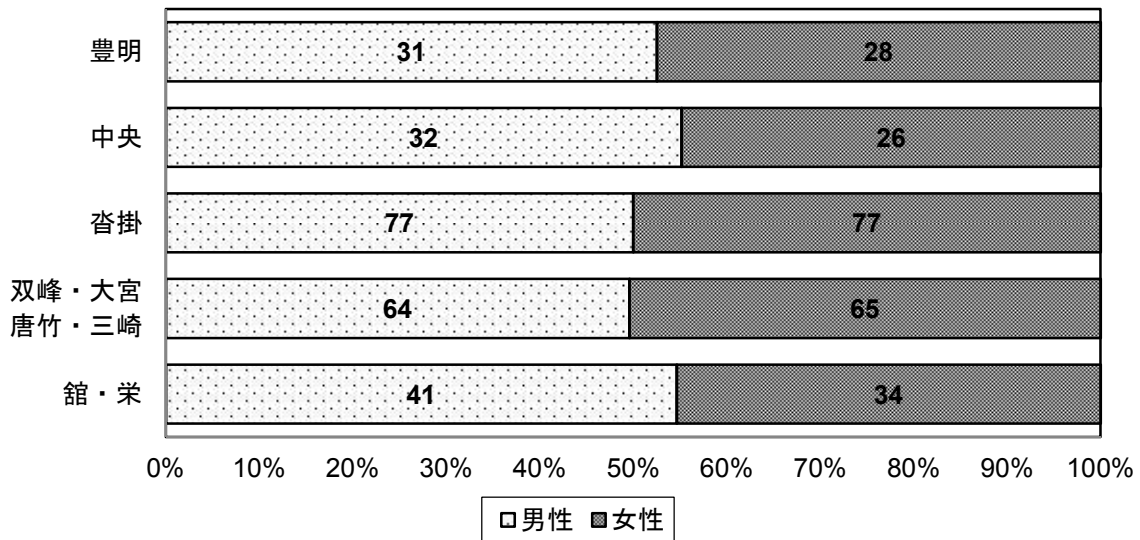


図 2.1 アンケート回答者の性別

全体では、男性 245 人 (52%)、女性 230 人 (48%) であり、ほぼ男女比の差は無いとみられる。また、地区毎に大きな差はない。

次に、アンケート回答者の地区ごとの年代の割合を図 2.2 に示す。

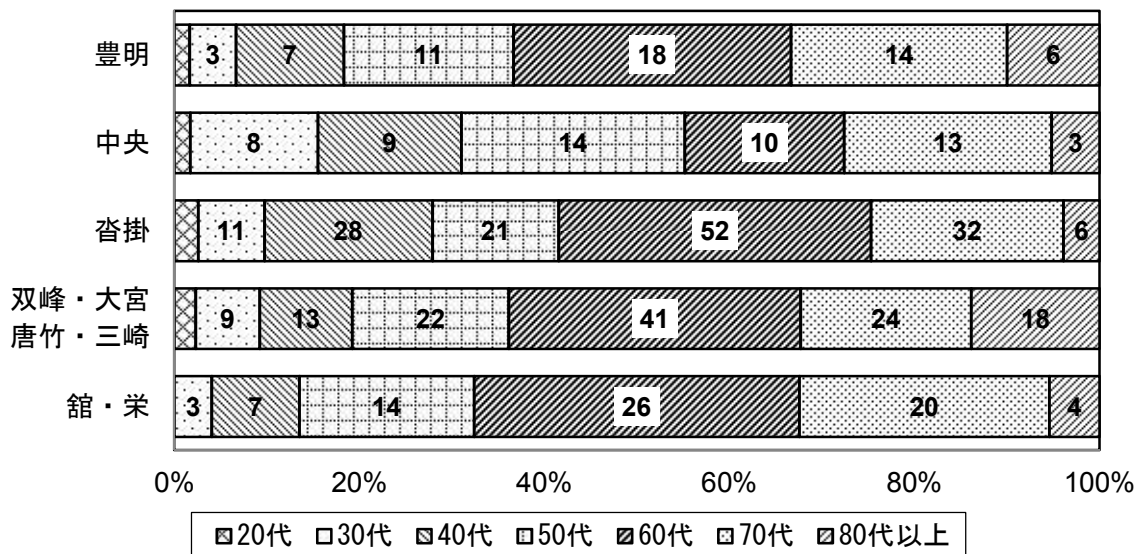


図 2.2 地区別 アンケート回答者の年代

全体で 60.2%の回答者が、60 代以上であり高齢の回答者が多い。一方で、中央地区では、20 代～50 代の割合が大きい。中央地区の人口構成が、生産年齢人口の割合が 64.8%と他の地区に比べ大きいからだと考えられる。

次に、アンケート回答者の居住年数の割合について図 2.3 に示す。

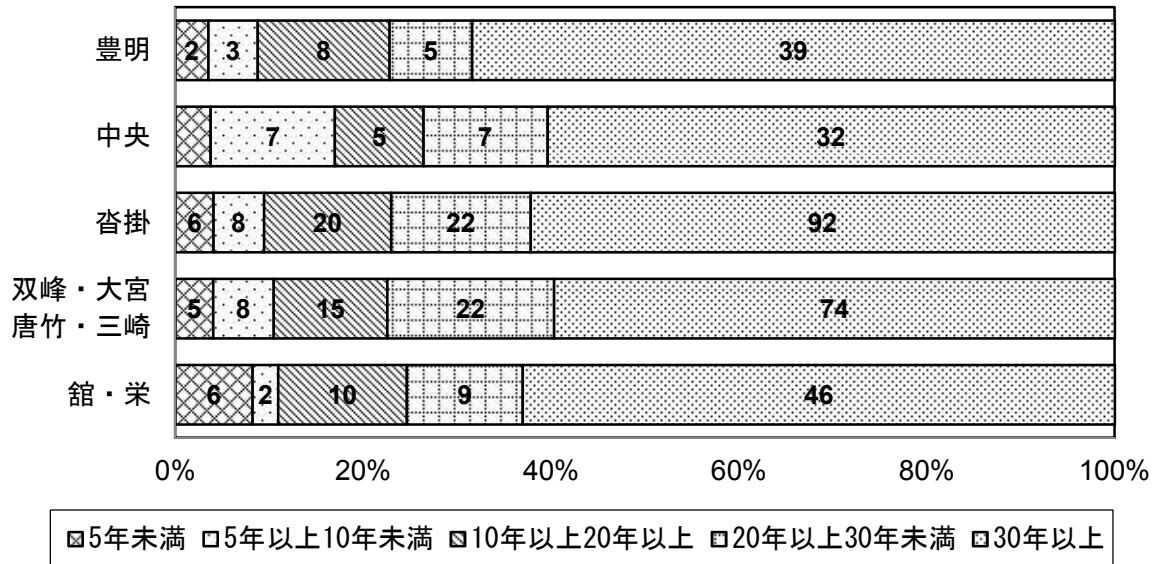


図 2.3 地区別 アンケート回答者の居住年数

全体の 59.3%の回答者が、30 年以上豊明市に居住している。また、地区毎に差はない。

次に、アンケート回答者の職業の割合について図 2.4 に示す。

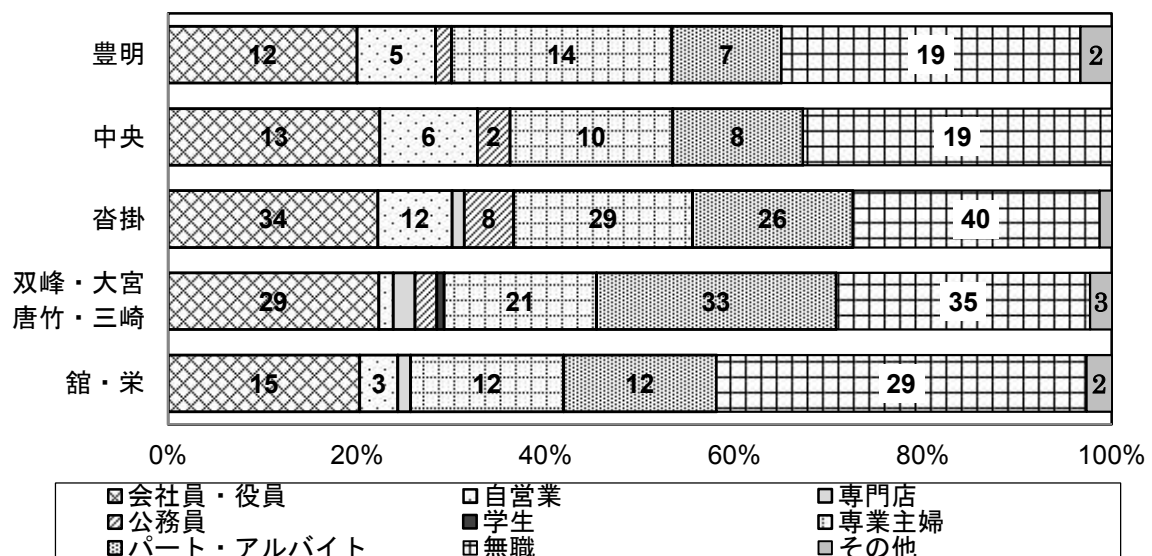


図 2.4 地区別 アンケート回答者の職業

全ての地区で、無職の回答者の割合が最も大きい。60 代以上の回答者が 6 割を超えているため、定年

退職などによって無職の回答者が多いと考えられる。それに次いで、会社員、専業主婦やパート・アルバイトの回答者の割合がどの地区も大きい。また、地区毎に大きな差は見られない。

次に、アンケート回答者の最後に卒業した学校の割合について図 2.5 に示す。

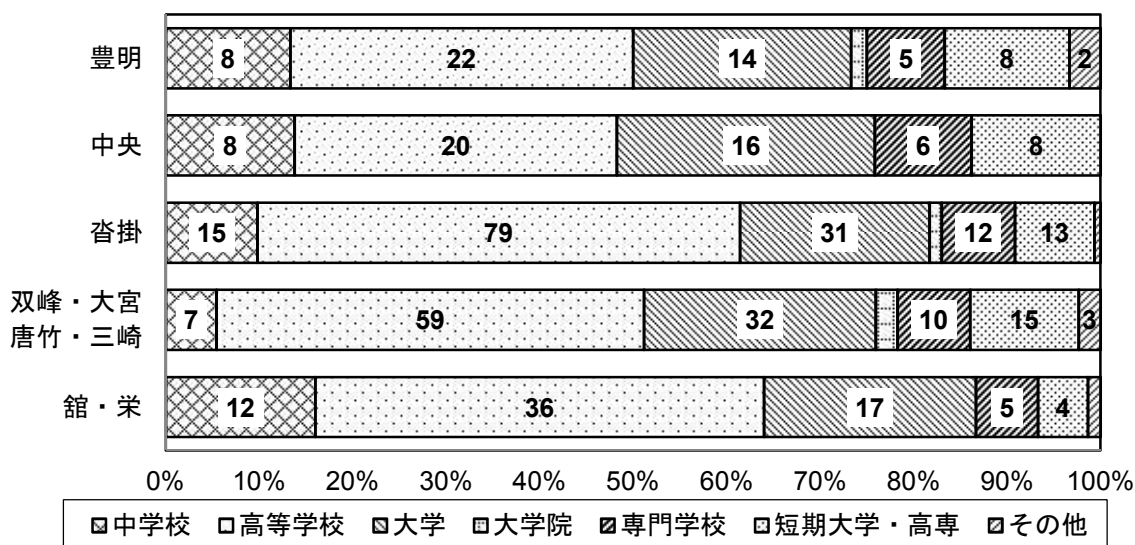


図 2.5 地区別 アンケート回答者の最終学歴

全ての地区で、高等学校の回答者の割合が最も大きい。それに次いで、大学の回答者の割合が大きい。また、地区毎に大きな差はない。

次に、アンケート回答者の世帯年収の割合について図 2.6 に示す。

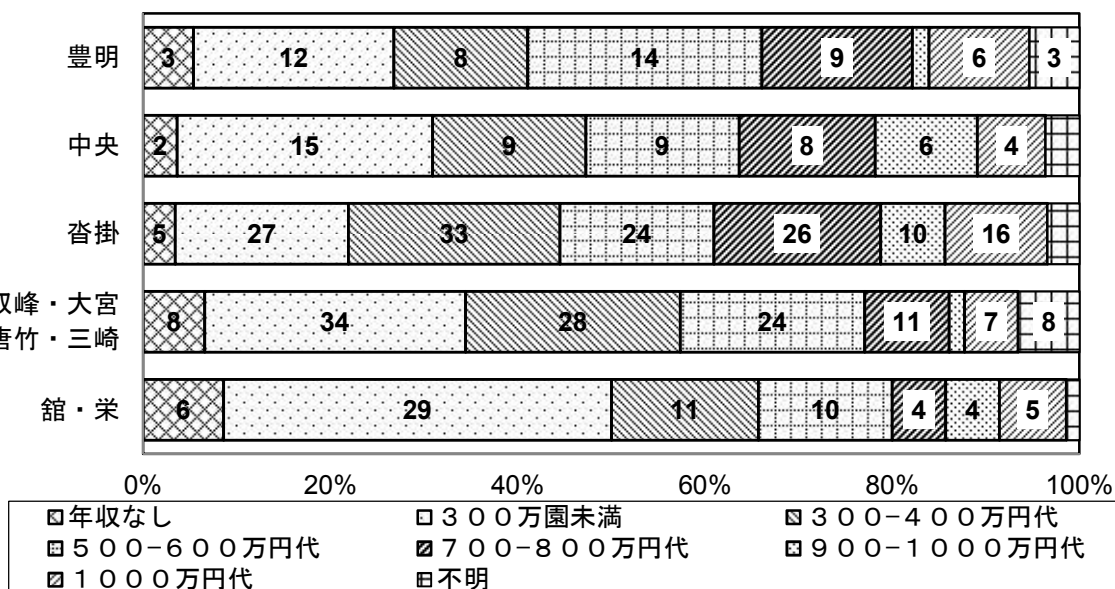


図 2.6 地区別 アンケート回答者の世帯年収

全体では、300 万円未満の回答者が 29.6%で最も多い。アンケートの回答者の 60 代以上の回答者の割

合が最も多いからだと考えられる。また、地区毎に大きな差はない。

次に、アンケート回答者の健康状態の割合について地区別に図 2.7 に示す。

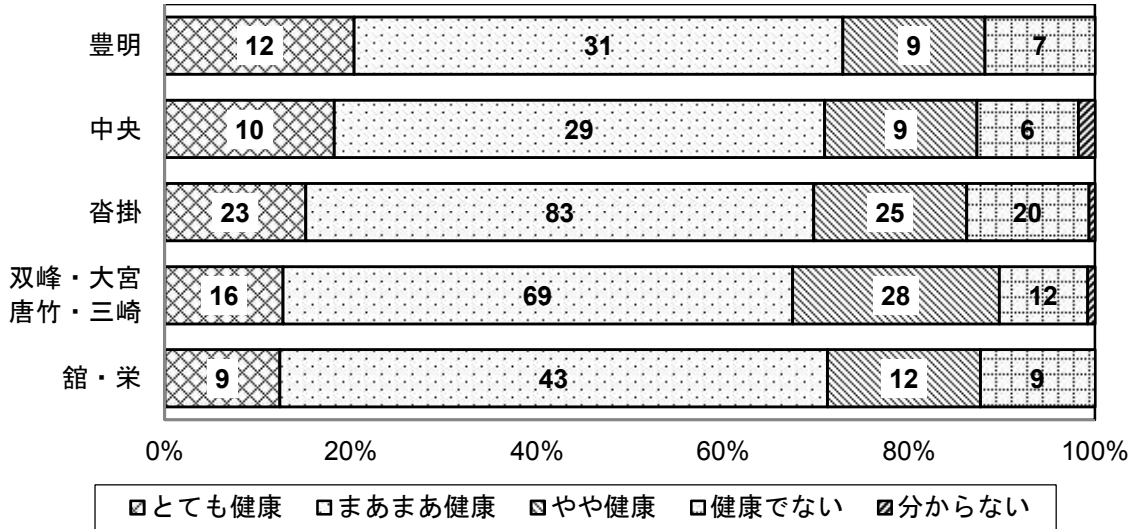


図 2.7 地区別 アンケート回答者の健康状態

全体では、「まあまあ健康」の回答者の割合が 53.5%で最も大きい。その一方で、「健康でない」の回答者の割合は、11.3%で最も小さい。また、地区毎に大きな差はない。

次に、アンケート回答者の健康状態の割合について年代別に図 2.8 に示す。

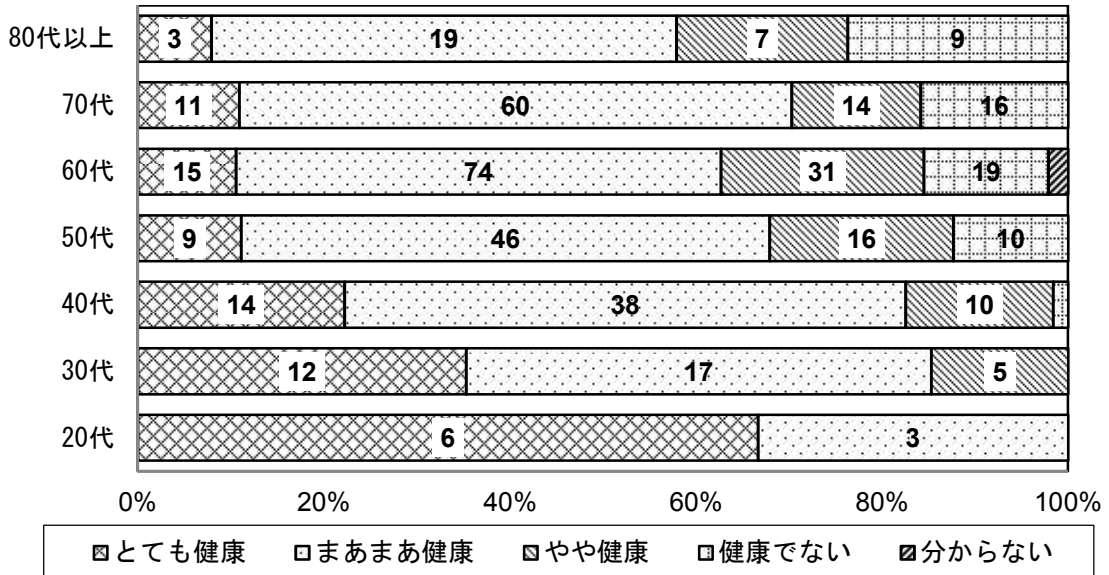


図 2.8 年代別 健康状態

健康状態は、年代が高齢になると、「とても健康」の回答の割合が、顕著に減少し、「健康でない」の割合が増大する。しかし、「まあまあ健康」、「やや健康」の割合は年代毎に大きく変化しない。

次に、アンケート回答者のストレスの状態の割合について年代別に図 2.9 に示す。

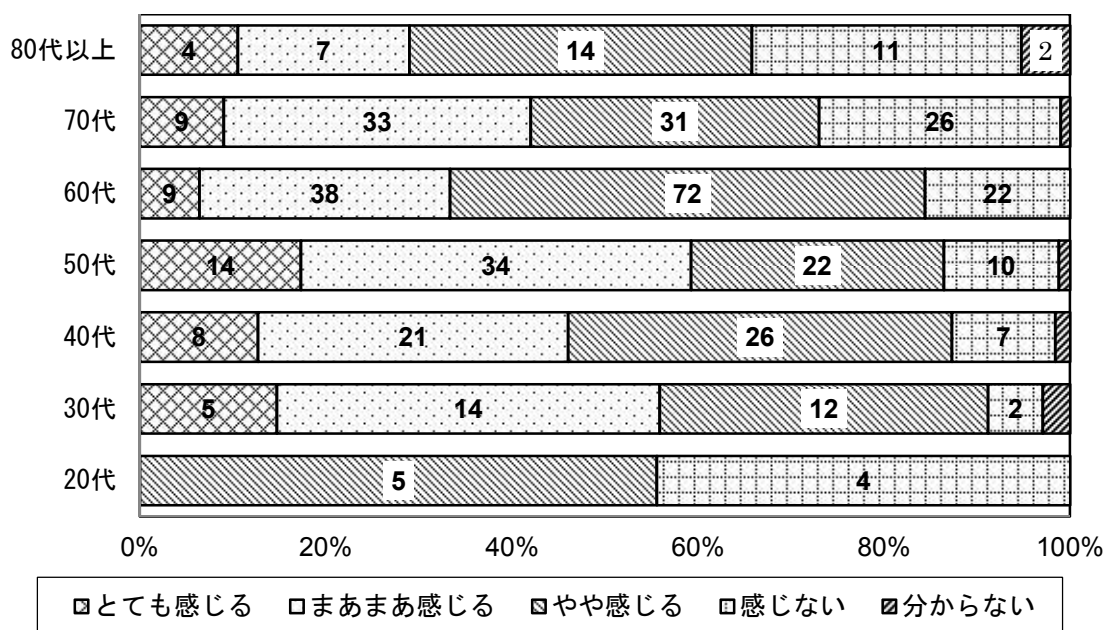


図 2.9 年代別 アンケート回答者のストレス状態

全体では、ストレスを「感じている」（「とても感じる」、「まあまあ感じる」、「やや感じる」）回答者の割合が 79.2%であり非常に大きい。ストレスを「感じない」の回答者が、高齢になるにつれ多くなる傾向にあり、健康状態と逆の傾向であることが分かる。また、「とても感じる」・「まあまあ感じる」の回答者が、30代・50代では約 6 割で非常に多い。

次に、アンケート回答者のストレスの状態の割合について性別に図 2.10 に示す。

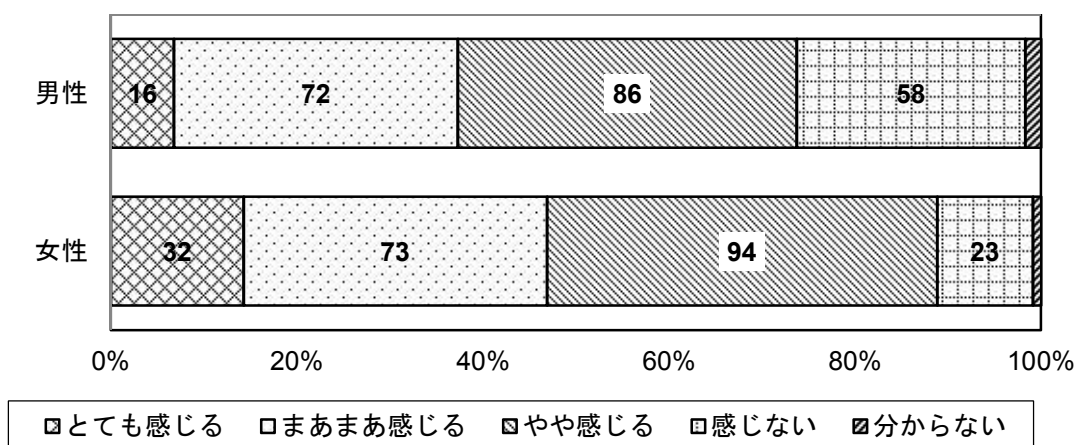


図 2.10 性別 ストレス状態

ストレスを「感じている」（「とても感じる」、「まあまあ感じる」、「やや感じる」）回答者の割合は、男性 71.6%、女性 86.1%で女性の方が大きいことが分かる。

2.2 公共サービスの充足状況

本章では、今回実施したアンケート調査の中の『Ⅱ.あなたのお住まいの地域について』『Ⅲ.公共施設の利用状況』での回答を基に、地区別の公共サービスの充足度を検討する。

2.2.1 コミュニティの健康度の得点

CASBEE 健康チェックリストにより、豊明市の地域コミュニティの充足度を評価した。地区別に地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）の内訳を図 2.11 に示す。

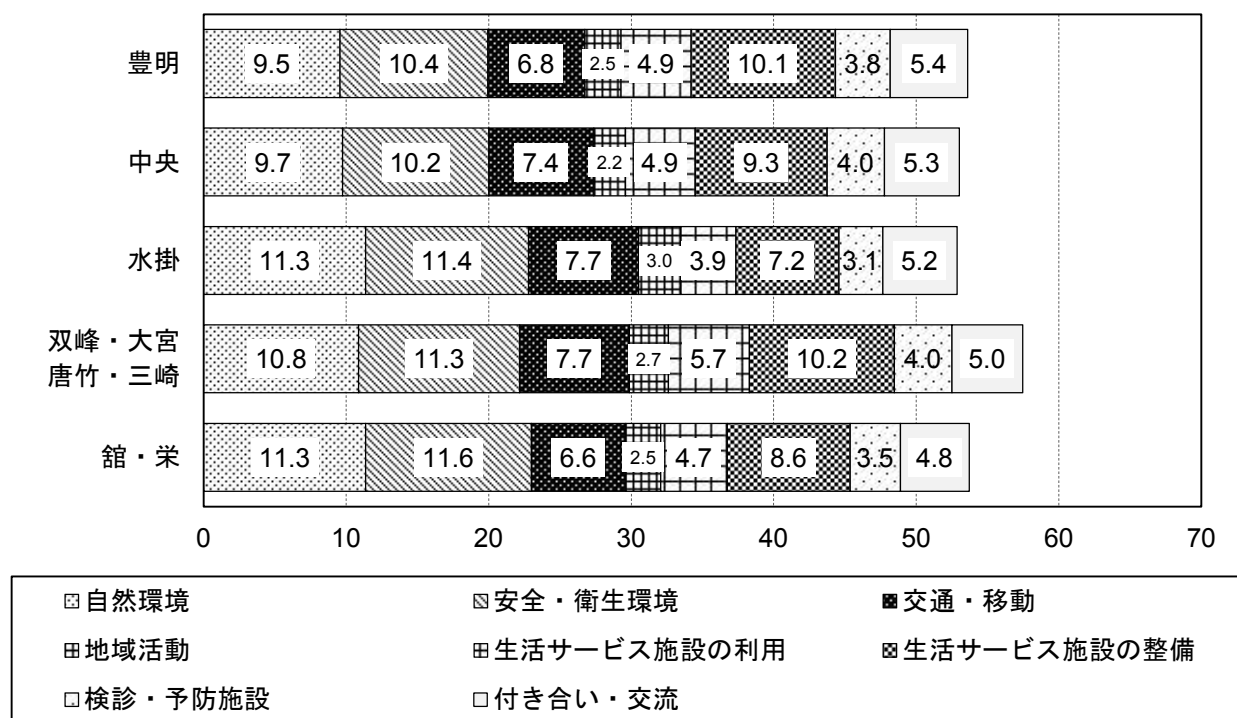


図 2.11 地区別地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）の内訳

地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）は、各地区大きな差はなかったが、双峰・大宮・唐竹・三崎が最も高く、次いで舘・栄が高かった。全国平均とほぼ同じレベルであった。

「地域活動」の項目を、詳しく分析する。

「地域活動」を、設問毎に集計した平均点を図 2.12 に示す。ただし、それぞれの項目の地域活動の参加頻度を問う設問であり、毎日～週に数回程度：4点、週に1回～月に数回程度：3点、月に1回～年に数回程度：2点、年に1回程度：1点、全く利用しない：0点が、配点されている。

全ての地区で、自治会・町内活動・美化活動・祭り等の参加の点数が最も高い。最低でも、平均して年に一回は地区の行事に参加していることが分かる。一方で、スポーツ活動や文化活動、生涯活動等への参加状況の点数は低い。

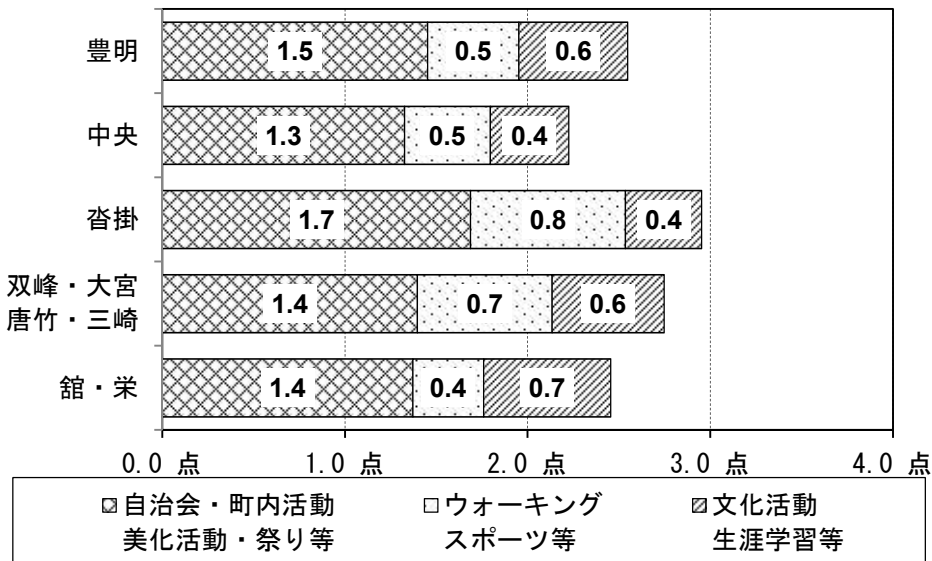


図 2.12 地域活動

「公共サービスの利用」の項目を、詳しく分析する。

「公共サービスの利用」を、設問毎に集計した平均点を図 2.13 に示す。ただし、それぞれの項目の公共サービスの利用頻度を問う設問であり、毎日～週に数回程度：4 点、週に 1 回～月に数回程度：3 点、月に 1 回～年に数回程度：2 点、年に 1 回程度：1 点、全く利用しない：0 点が、配点されている。

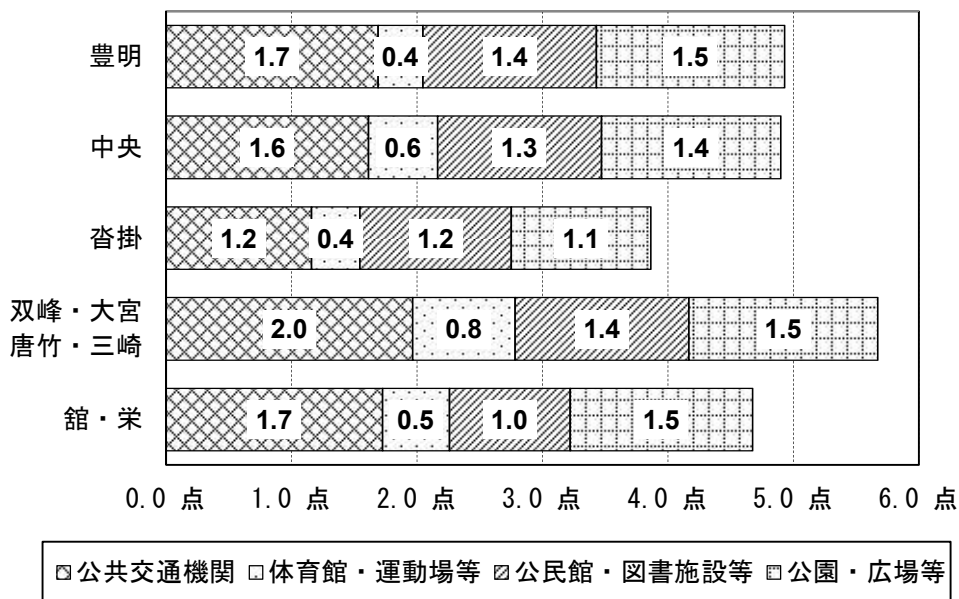


図 2.13 公共サービスの利用

公共交通機関では、双峰・大宮・唐竹・三崎地区の点数が最も高い。鉄道の駅や豊明市公共施設巡回バスがあることがその理由であると考えられる。その一方で、沓掛地区は、最も点数が低い。また、体育館・スポーツ施設・運動場等では、どの地区も点数が低く利用がほぼ無いことが分かる。公民館や集会所、図書施設では、豊明地区、双峰・大宮・唐竹・三崎地区の点数が最も高く、館・栄地区の点数が低い。これらの施設は全ての地区で平均して年に 1 回は利用されていることが分かる。

「公共サービスの整備」の項目を、詳しく分析する。

「公共サービスの整備」を、設問毎に集計した平均点を図 2.14 に示す。それぞれの項目の公共サービスの整備状況について整備されていると思うかどうかを問う設問である。非常によく当てはまる：3 点、やや当てはまる：2 点、あまり当てはまらない：1 点、全く当てはまらない：0 点が、配点されそれぞれの項目で平均をとった合計点数である。

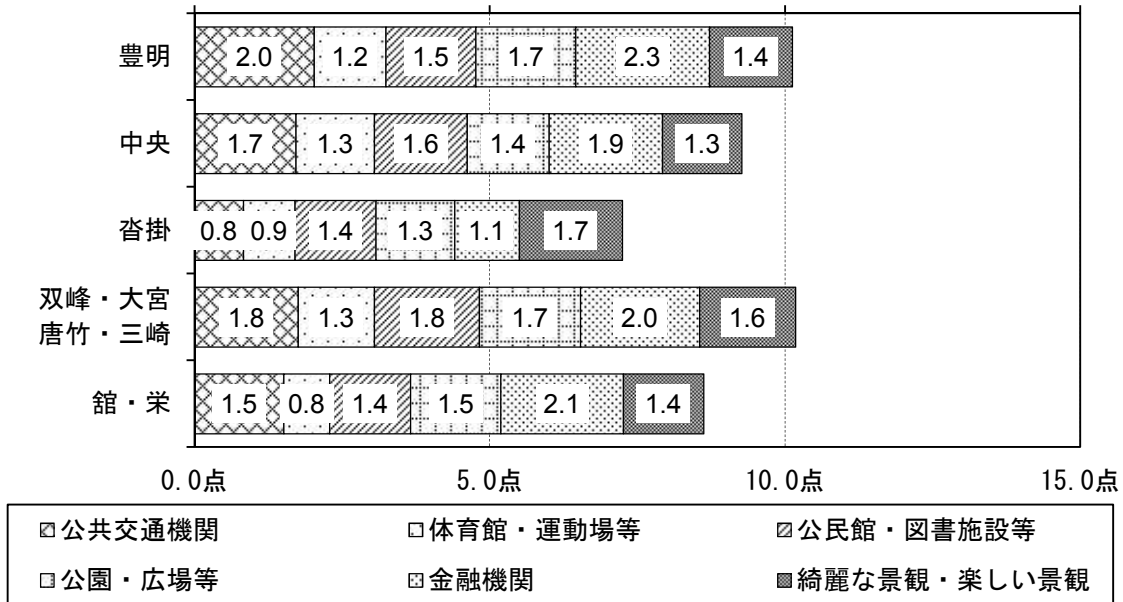


図 2.14 公共サービスの整備

全ての地区で、どの項目も 1 点代が多い。公共交通機関や金融機関では、沓掛の点数が顕著に低いことが分かる。また、体育館・スポーツ施設等では、どの地区の点数も低いことが分かる。

公共交通機関、体育館・スポーツジム・運動場等、公民館・集会所・図書施設、公園・広場・遊歩道等の公共サービスの整備・利用状況とこれらの相関関係を分析する。

まず、公共交通機関（バス・鉄道等）について利用状況と整備状況の関係を図 2.15 に示す。ただし、利用状況の全国平均は約 40%、整備状況の全国平均は約 60%である。

全体として利用状況よりも、整備状況の点数が高い地区が多い。車社会であることから、公共交通機関はあまり利用されず、利用の点数の方が低いと考えられる。豊明地区は、最も整備状況の点数が高く、双峰・大宮・唐竹・三崎地区では利用状況の点数が最も高い。一方で、沓掛は利用・整備状況ともに点数が最も低い。沓掛地区には、最寄りの駅が無く、バスの路線も少ないことが原因だと考えられる。

公共交通機関（バス、鉄道等）利用状況と整備状況の相関関係を図 2.16 に示す。

近似線から、公共交通機関の利用状況と整備状況は関係性が非常に強く、決定係数が $R^2=0.65$ であった。移動手段として、公共交通機関は重要であり整備が充実すると、利用状況も高まる傾向がある。

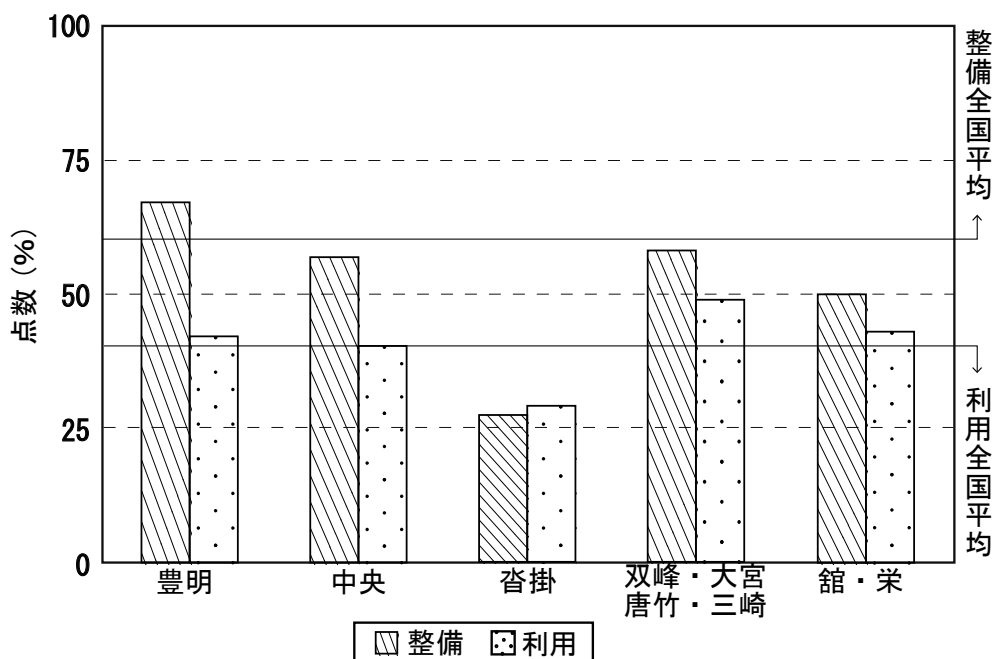


図 2.15 公共交通機関の利用・整備状況

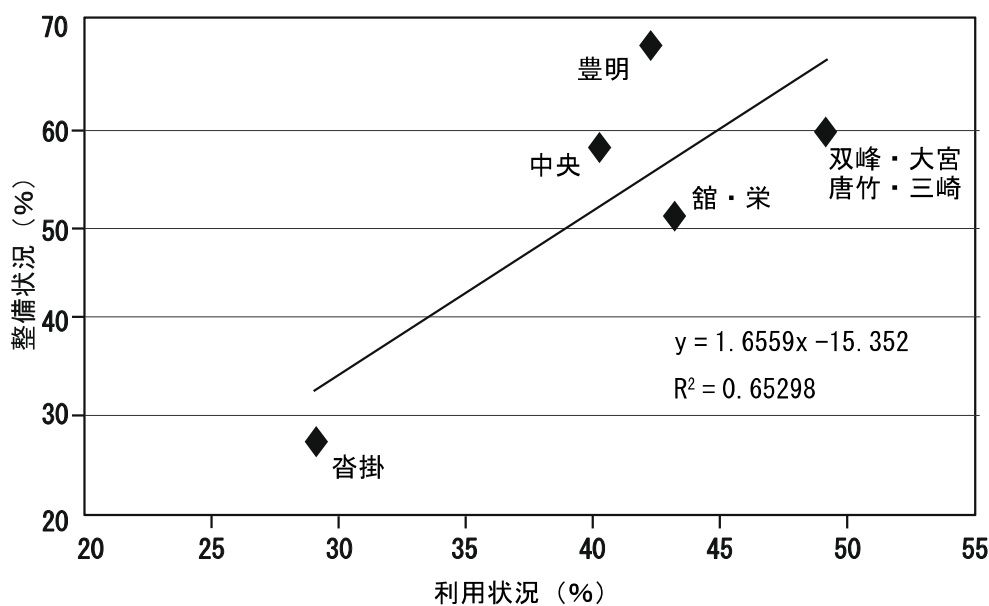


図 2.16 公共交通機関の利用状況と整備状況の相関関係

体育館・スポーツジム・運動場等について利用状況と整備状況を図 2.17 に示す。ただし、利用状況の全国平均は約 40%、整備状況の全国平均は約 60%である。

整備・利用状況ともに、全ての地区で全国平均に達していない。

体育館・スポーツジム・運動場等の利用状況と整備状況の相関関係を図 2.18 に示す。

近似線から、体育館・スポーツジム・運動場等における利用状況と整備状況は関係が弱く決定係数 $R^2=0.1507$ であった。このような施設は、必要としている人が使うため整備状況と利用状況に相関関係が弱いと考えられる。

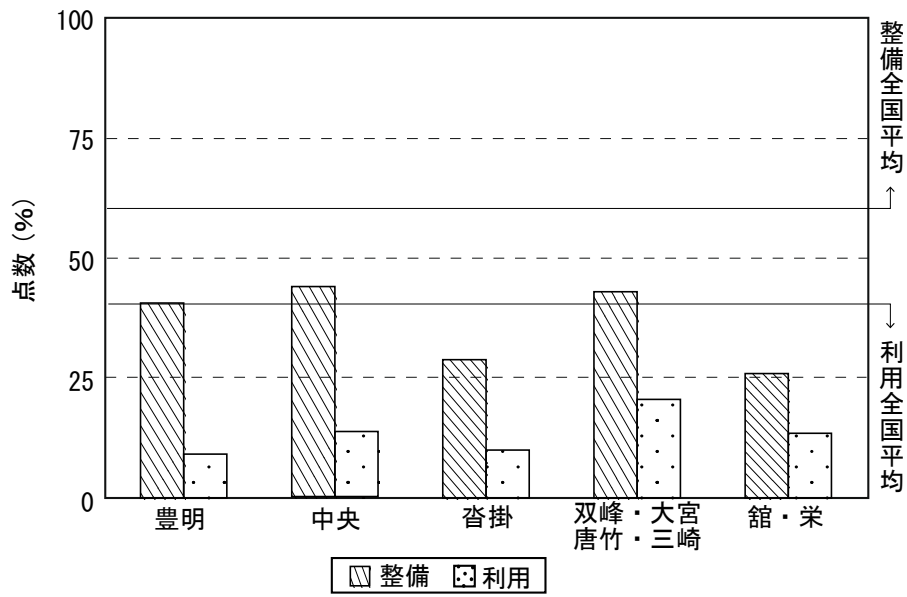


図 2.17 体育館・スポーツジム・運動場等の利用・整備状況

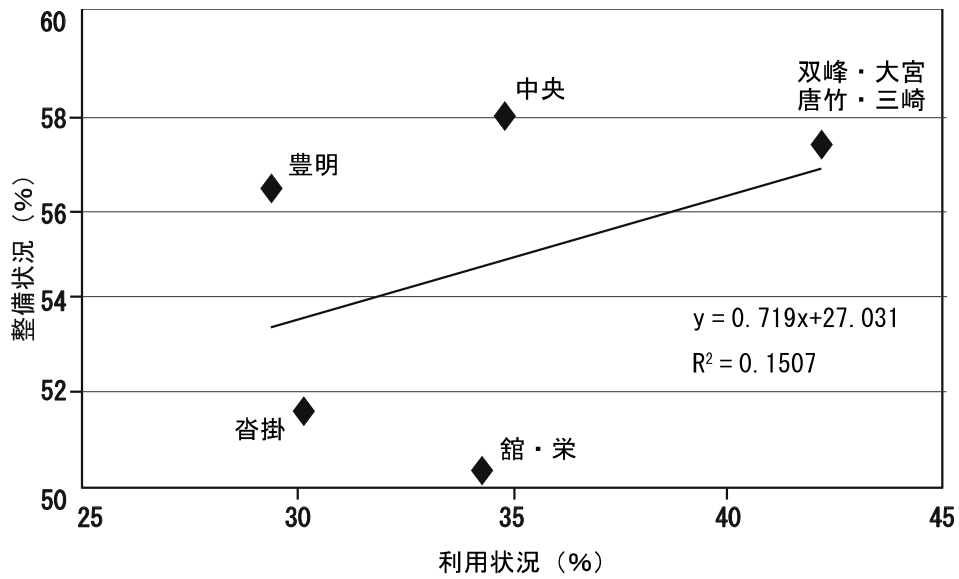


図 2.18 体育館・スポーツジム・運動場等の利用状況と整備状況の相関関係

公民館・集会所・図書施設等について利用状況と整備状況を図 2.19 に示す。ただし、利用状況の全国平均は約 40%、整備状況の全国平均は約 60%である。

全ての地区で、整備・利用状況の点数が全国平均より低い。双峰・大宮・唐竹・三崎地区が、どちらの点数も最も高いが、どの地区も同じぐらい利用され大きな差はない。

公民館・集会所・図書施設等の利用状況と整備状況の相関関係を図 2.20 に示す。

近似線から、公民館・集会所・図書施設等における利用状況と整備状況は関係が強く、決定係数 $R^2=0.55$ であった。

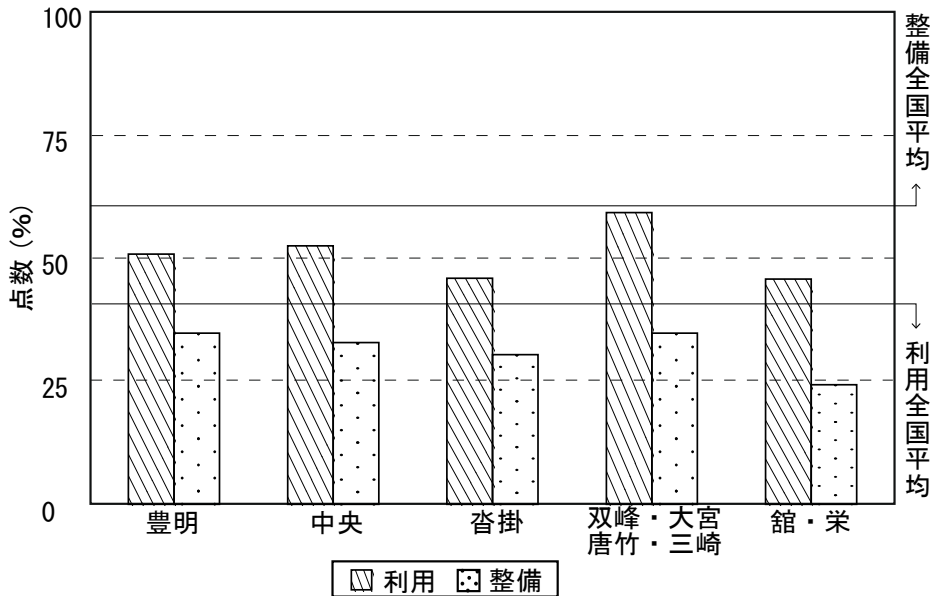


図 2.19 公民館・集会所・図書館等の利用・整備状況

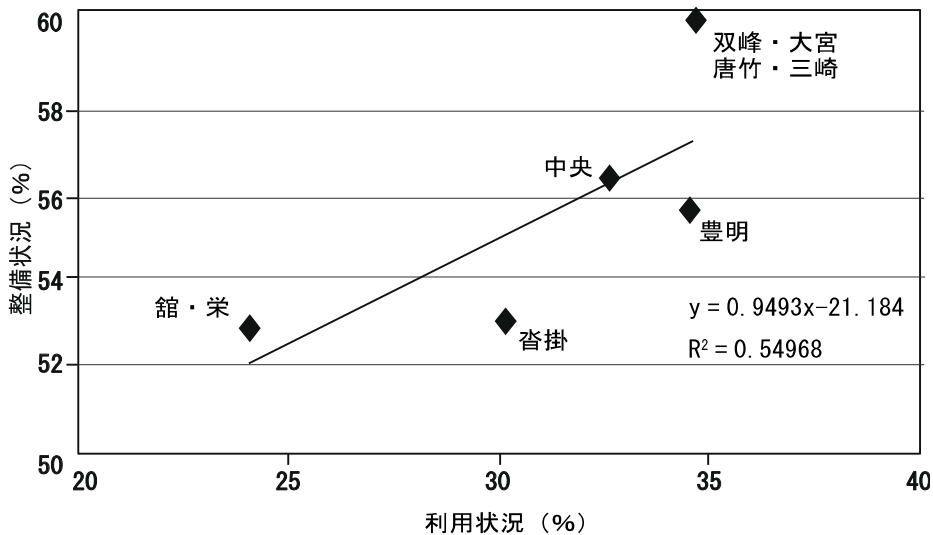


図 2.20 公民館・集会所・図書館等の利用状況と整備状況の相関関係

公園・広場・遊歩道等について利用状況と整備状況を図 2.21 に示す。ただし、利用状況の全国平均は約 40%、整備状況の全国平均は約 60%である。

全ての地区で、整備・利用状況の点数が全国平均より低い。どの地区も同じぐらい利用されており、大きな差はない。

公園・広場・遊歩道等の利用状況と整備状況の相関関係を図 2.22 に示す。

近似線から、公園・広場・遊歩道等における利用状況と整備状況は関係が強く、決定係数 $R^2=0.62$ であった。地区に、公園等公共の広場があると人が集まることが分かる。

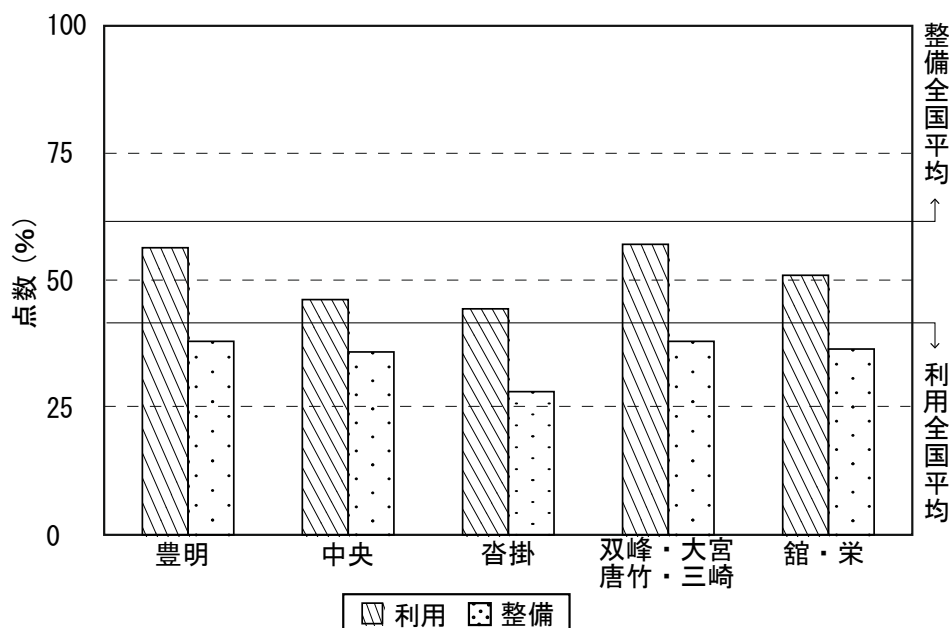


図 2.21 公園・広場・遊歩道等の利用・整備状況

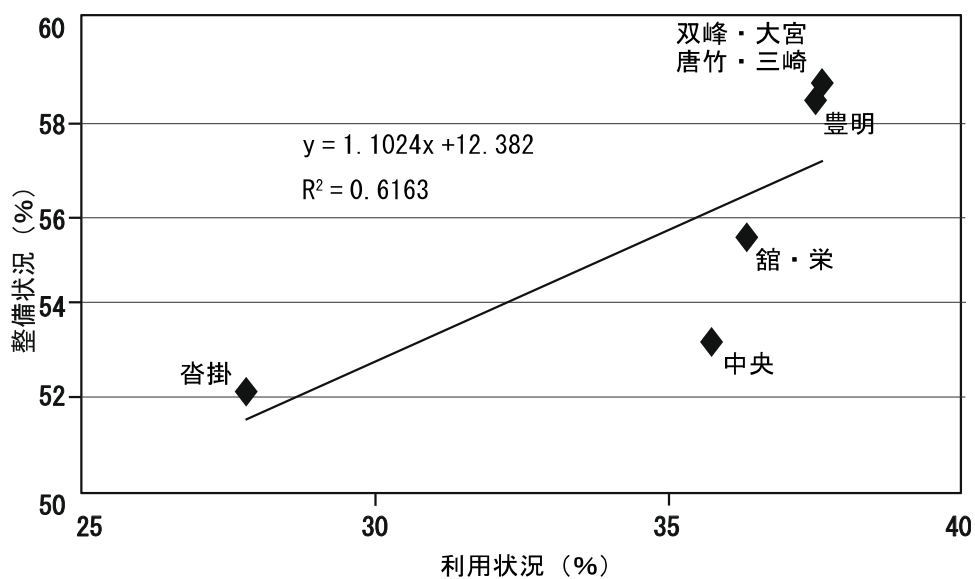


図 2.22 公園・広場・遊歩道等の利用状況と利用しやすさ

次に地区別地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）と施設数/地区面積(km²)の相関関係を図 2.23 に示す。

近似線から、公共サービスの充足度と施設/地区面積(km²)は関係が非常に強く、決定係数が R²=0.75647 であった。双峰・大宮・唐竹・三崎地区は、施設/地区面積に対して地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）が高く、公共施設の充実している三崎地区を中心に公共サービスが比較的充実していると考えられる。一方で、館・栄地区や中央地区は、施設/地区面積に対して地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）が低いことが分かる。

次に地域コミュニティの充足度（コミュニティの健康度）と施設数/人口(人)の相関関係を図 2.24 に示す。近似線から、公共サービスの充足度と施設数/人口は関係が無いことが分かる。

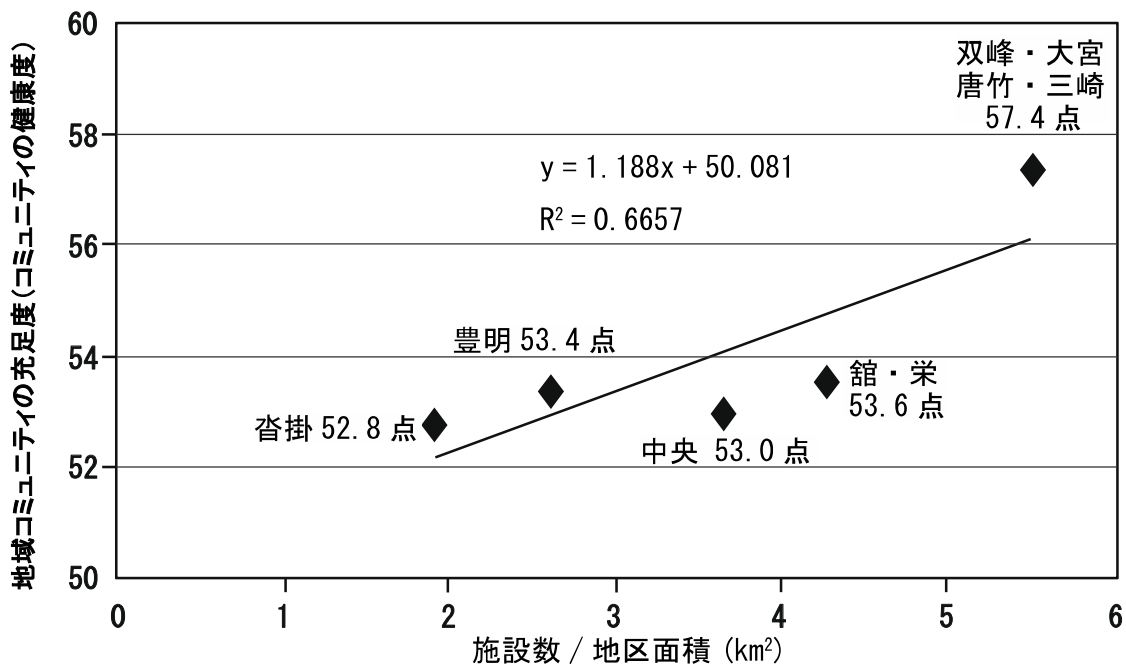


図 2.23 地区別公共サービスの充足度と施設/地区面積(km²)

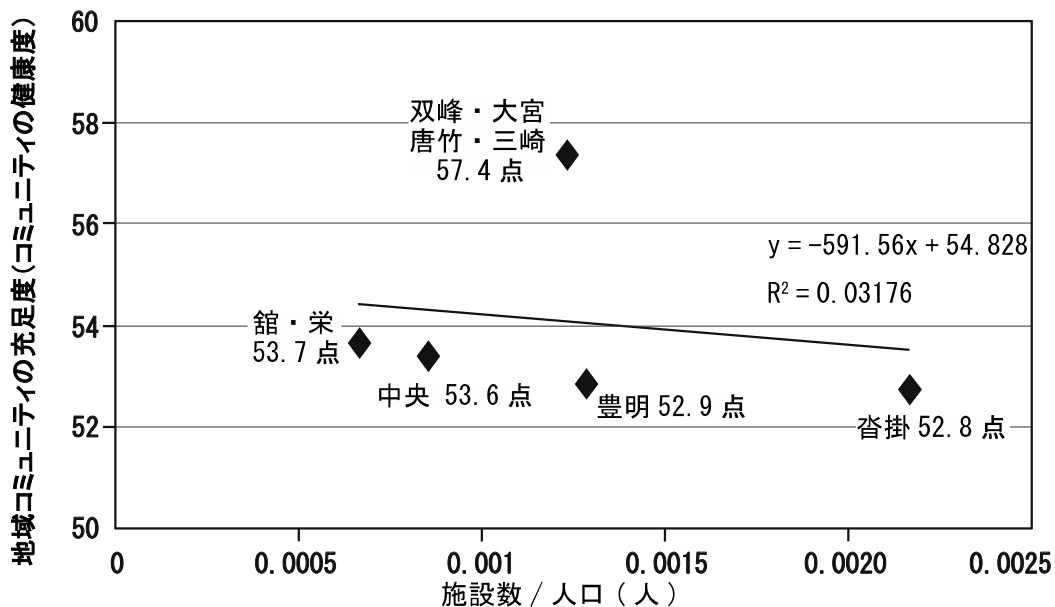


図 2.24 地区別公共サービスの充足度と施設数/人口 (人)

2.3 回答者属性と公共施設の利用状況の関係

ここでは、今回実施したアンケートの回答を基に、「居住地区」、「年代」、「世帯収入」、「健康」といったアンケート回答者属性と公共施設の利用状況との関係を分析した。

まず、豊明市の17の公共施設の利用率を図2.25示す。これは、17それぞれの公共施設を最近一年間での、利用の有無を問う設問である。

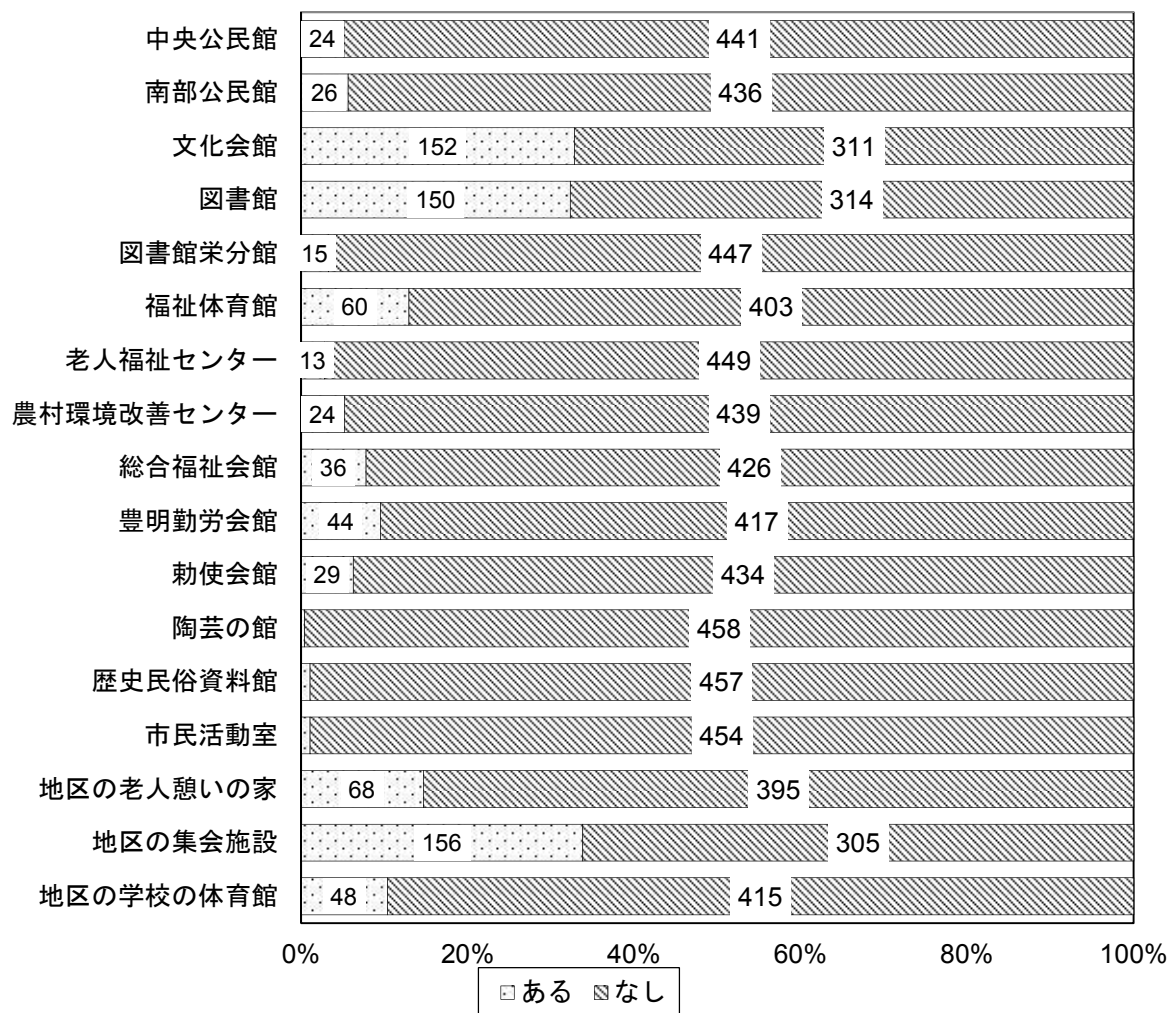


図 2.25 公共施設の利用率

最も、利用率が高い施設は文化会館 32.8%、図書館 32.3%の順に利用率が高い(地区の施設は除く)。しかし、大部分の施設について利用率が低く、施設の見直しや公共サービスの見直しが必要だと考えられる。

次に、17施設のそれぞれの利用しない理由を図示する。

どの公共施設も、「利用する必要が無い」の割合が顕著に大きい。また、図書館栄分室や老人福祉センター、農村環境改良センター、陶芸の館、歴史民族資料館、市民活動室では「存在場所を知らない」の割合がそれぞれ約2割で、公共施設をもっと市民に向け認知してもらう必要があると考えられる。

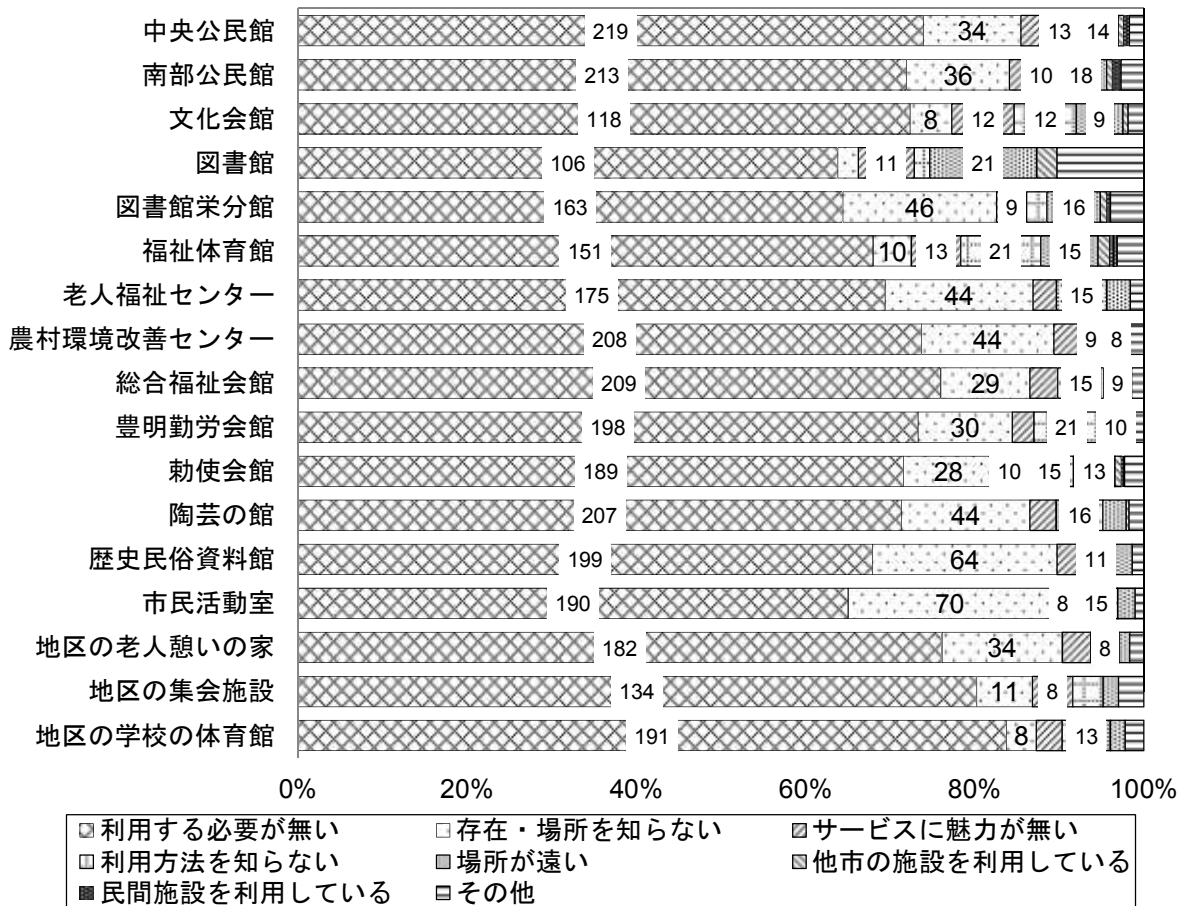


図 2.26 公共施設を利用しない理由

次に、アンケート回答者の「居住地域」別に、最近1年以内に17の公共施設のうちのいずれかの施設を何回利用したか分析結果を図 2.27 に示す。

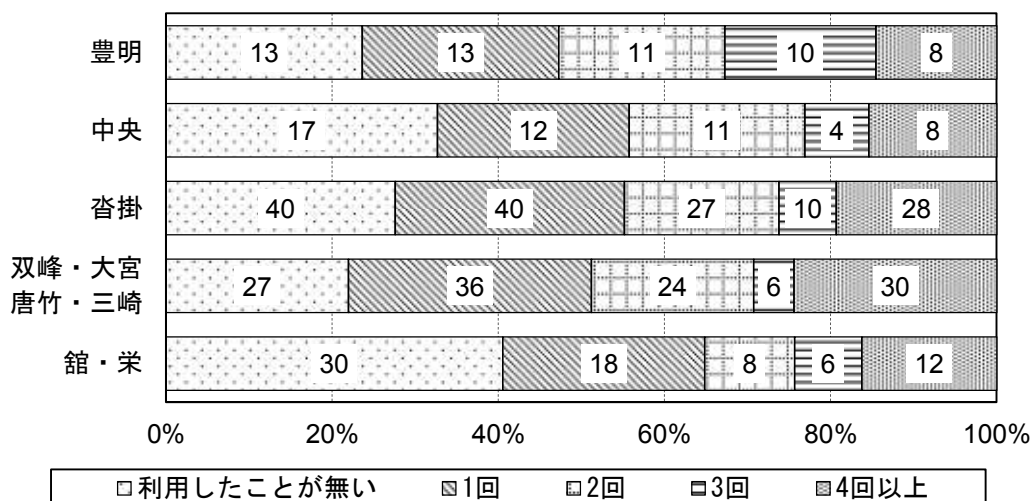


図 2.27 地区別 公共施設の利用状況

双峰・大宮・唐竹・三崎地区が、最も公共施設の利用頻度が高く、館・栄地区の利用頻度が最も低いことが分かる。

次に、年代別に最近1年以内に17の公共施設のうちのいずれかの施設を何回利用したか分析結果を図2.28に示す。20代・80代の回答者が少ないため、30代・70代と合わせて集計する。

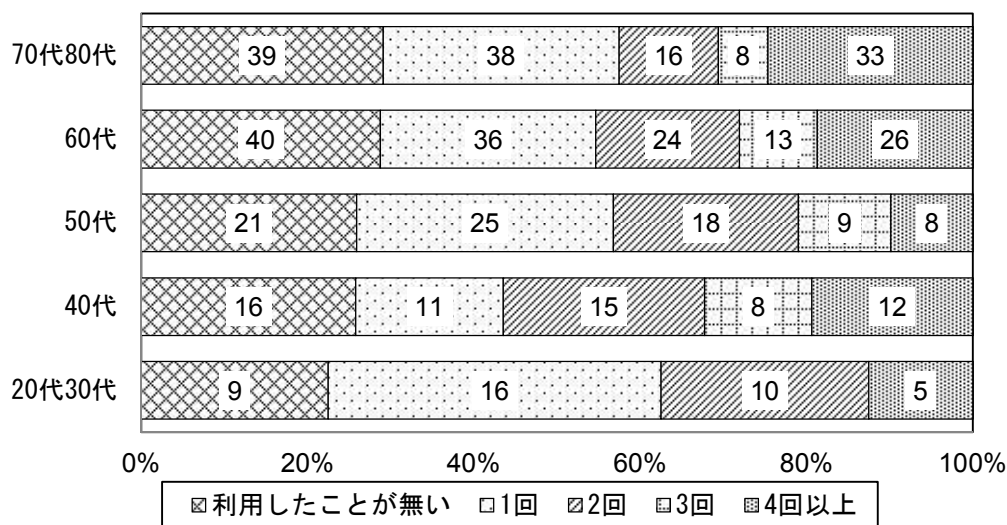


図 2.28 年代別 公共施設の利用状況

年代毎の利用状況の差は、特にないが、70代・80代の24.6%が、年に4回以上公共施設を利用していることが分かる。

次に、世帯収入別に、最近1年以内に17の公共施設のうちのいずれかの施設を何回利用したか分析結果を図2.29に示す。

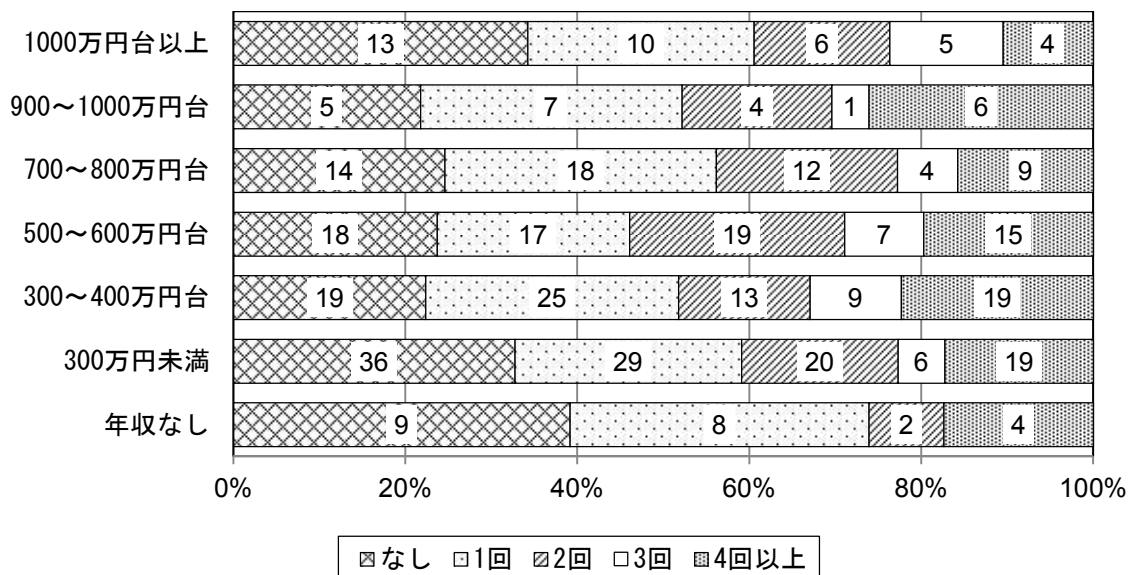


図 2.29 世帯収入別 公共施設の利用状況

年収なし、1000万円以上の回答者が、公共施設を全く利用しない人が多く、約4割を占めている。

次に、日頃の健康状態別に、最近1年以内に17の公共施設のうちのいずれかの施設を何回利用したか分析結果を図2.30に示す。

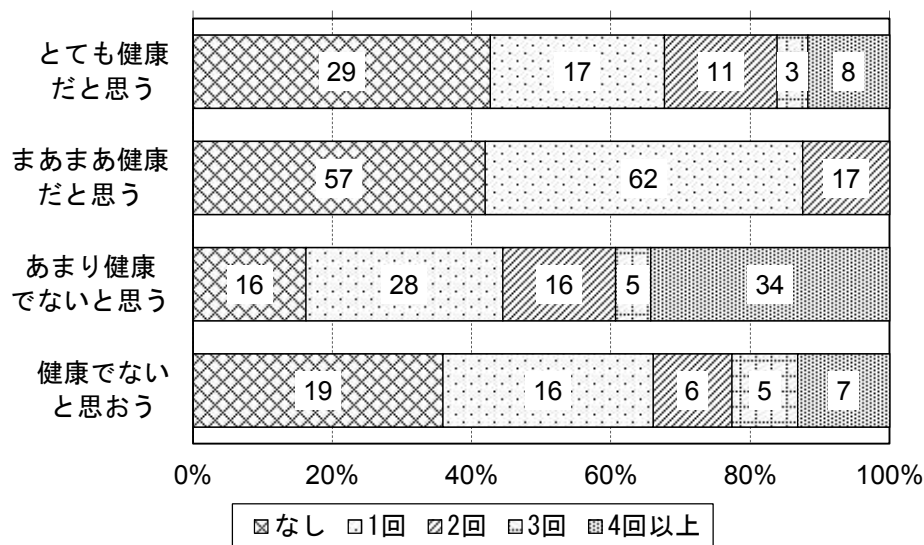


図 2.30 健康状態別 公共施設の利用状況

健康状態と公共施設の利用状況に、関係性は無いと考えられる。

次に、日頃のストレス状態と公共施設の利用状況を図2.31に示す。

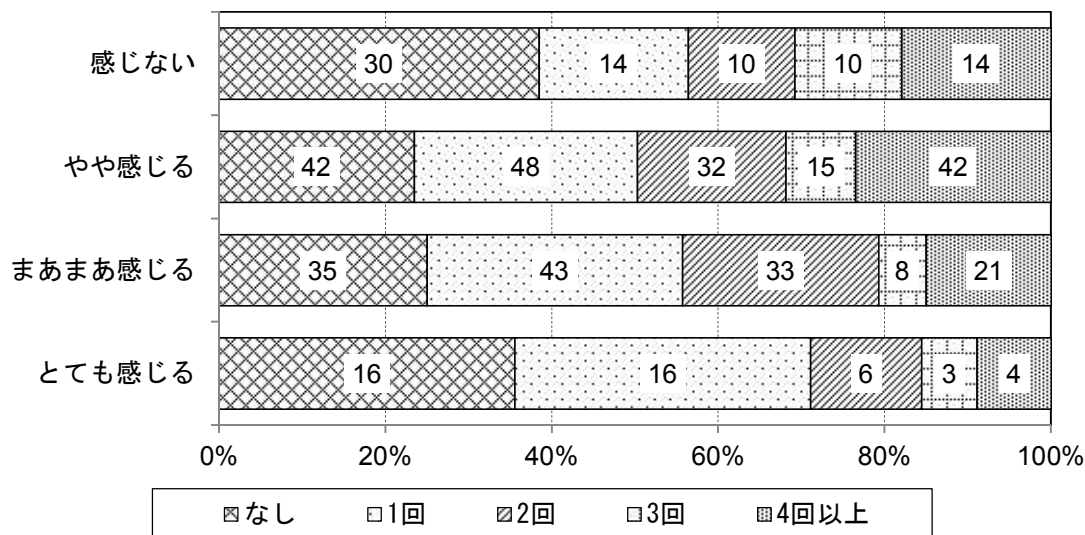


図 2.31 ストレス状態別 公共施設の利用状況

ストレス状態別と公共施設の利用状況に、関係性はないと考えられる。

2.4 市民の行動範囲の分析

既住の研究では、公共施設を利用する最大の理由として「近さ」が挙げられていると報告されている。つまり、市民の日常の行動範囲を超える場所に公共施設が位置すると、利用されなくなる可能性がある。そこで、本章では市民の日常の行動範囲を「年代・性別」の観点から分析した。

2.4.1 日常生活でよく立ち寄る施設・関係の深い施設

まず、「地区別」に日常生活でよく立ち寄る施設・関係の深い施設を図 2.32 に、「性別」に同じく分析したものを図 2.33 に示す。

全体では、スーパーやコンビニと関係が深いことが分かる。地区毎では、大きな差はない。一方で、性別では男性より女性の方が、学校との関係が強いことが分かる。

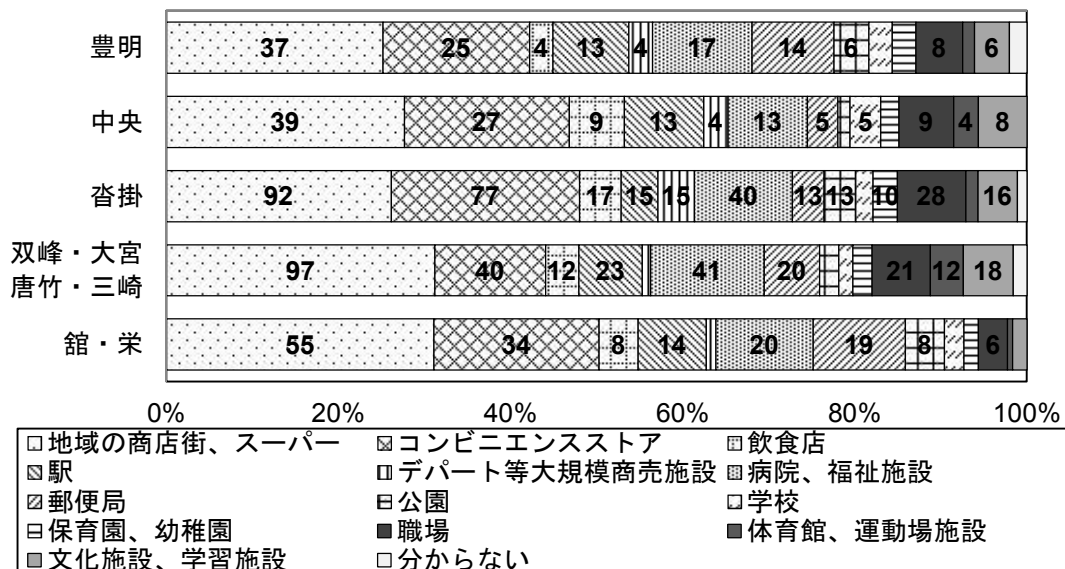


図 2.32 地区別 日常生活でよく立ち寄る施設・関係の深い施設

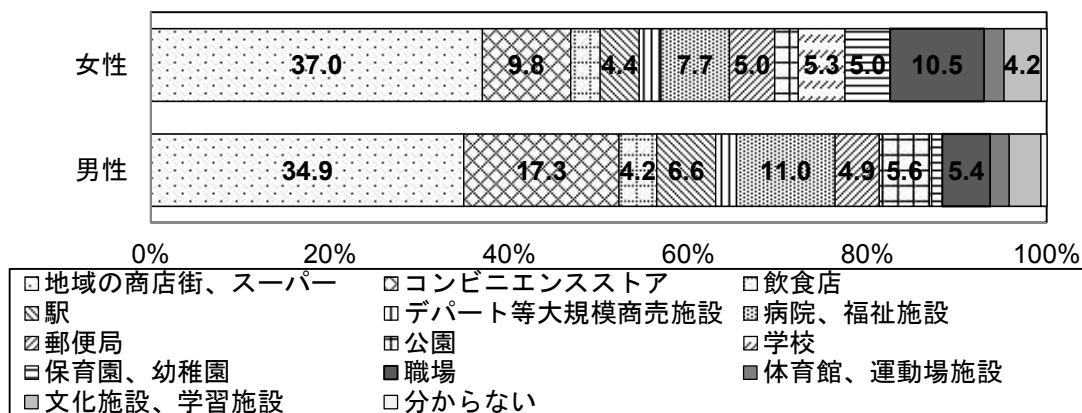


図 2.33 性別 日常生活でよく立ち寄る施設・関係の深い施設

年代・性別に日常生活においてよく立ち寄る施設・関わりの深い施設との関係性を明らかにするため、コレスポネンス分析^{※1}を行った結果を図 2.34 に示す。

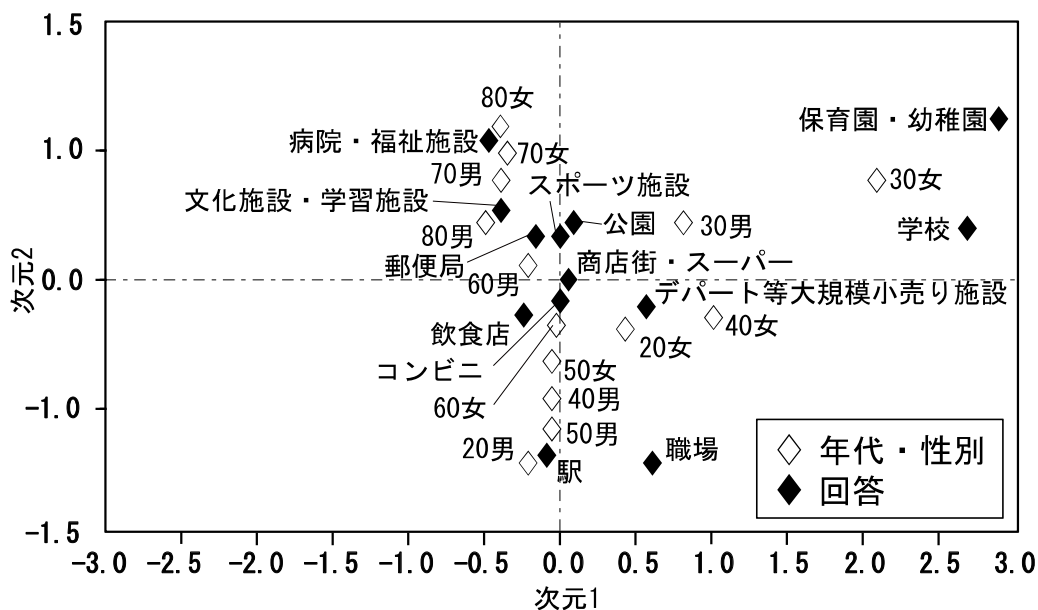


図 2.34 コレスポネンス分析結果

次に、これらの要素をクラスター分析^{※2}によりグルーピングした結果を図 2.35、これらをまとめたものを図 2.36 に示す。

(i) 70代・80代 男性・女性 (ii) 60代 男性・女性 (iii) 30代 男性、20代・40代 女性 (iv) 20代・40代・50代 男性、50代 女性、(v) 30代 女性の5つのグループに分類された。

(i) 70代・80代 男性・女性は、病院・福祉施設や文化施設・学習施設といった公共施設との関係が強い。(ii) 60代 男性・女性は、商店街・スーパーや郵便局、スポーツ施設、公園と関係が強い。また、(iii) 30代 男性、20代・40代 女性は、デパート等大規模小売り施設 (iv) 20代・40代・50代 男性、50代 女性は、駅や職場と関係が強い。(v) 30代 女性は、保育園・幼稚園や学校と関係が強いという結果になった。高齢になるほど、日常生活において様々な公共施設と関わりが強いことが分かった。また、(i) (v) のグループでは、行動範囲は地域が中心で地域密着型である。一方で、(iii) (iv) のグループでは、行動範囲が広い傾向にあることが分かる。

※1 コレスポネンス分析：2つのカテゴリカル変数の相互関係をしめす統計解析手法

※2 クラスター分析：異なる性質のものが混ざりあっている集団（対象）の中から互いに似たものを集めて集落（クラスター）を作り、対象を分類する統計解析手法

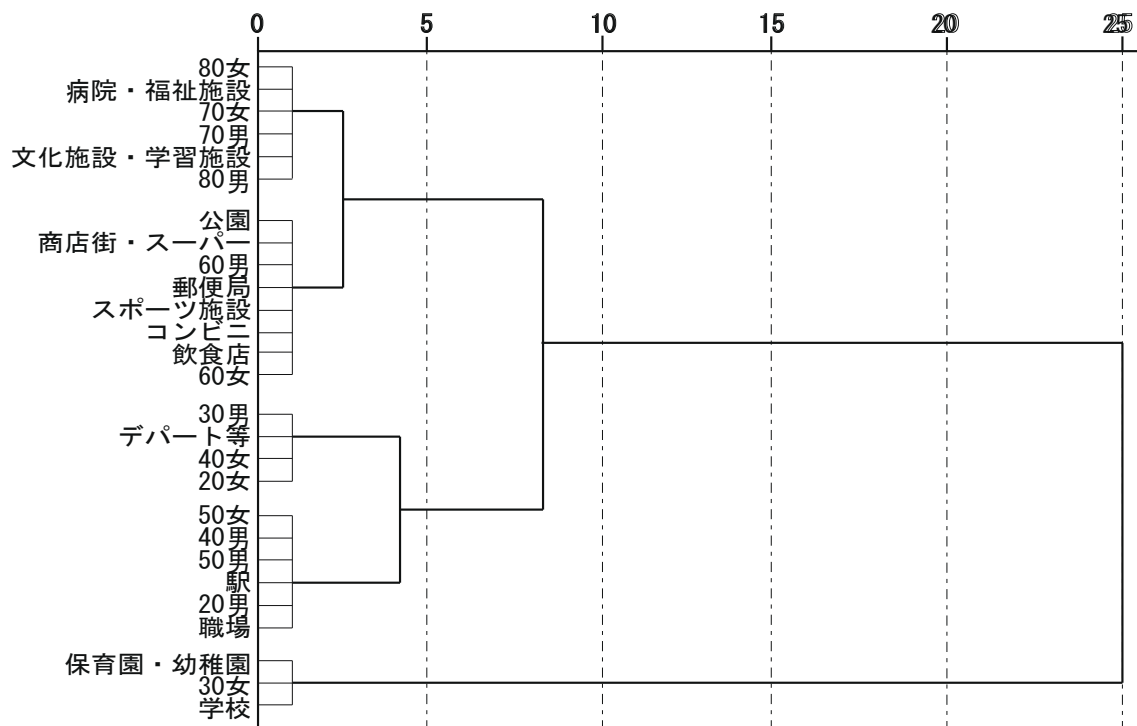


図 2.35 クラスター分析結果

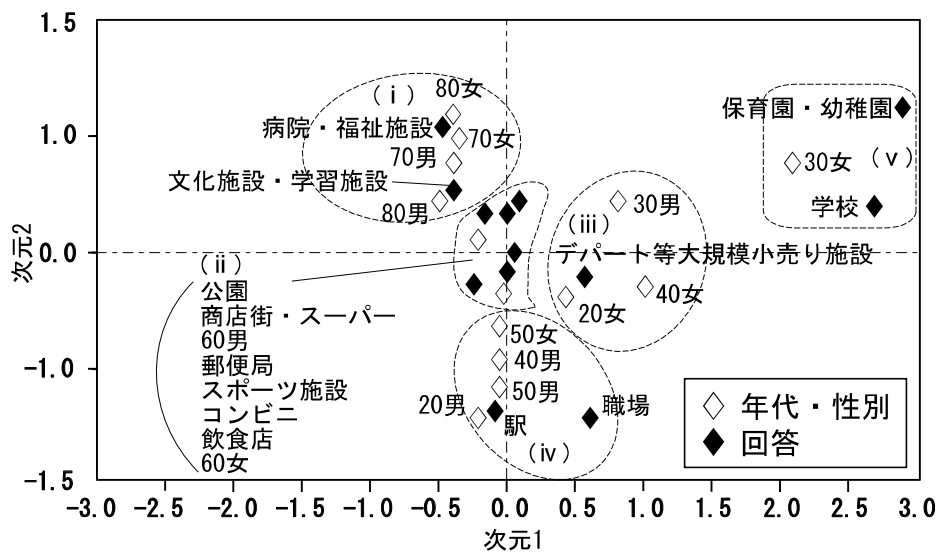


図 2.36 日常生活においてよく立ち寄る施設・関係の深い施設

2.4.2 公共施設へのアクセス

「利用しやすい公共交通機関（バス・鉄道等）があるか」という設問の結果を地区別に図 2.37 に示す。

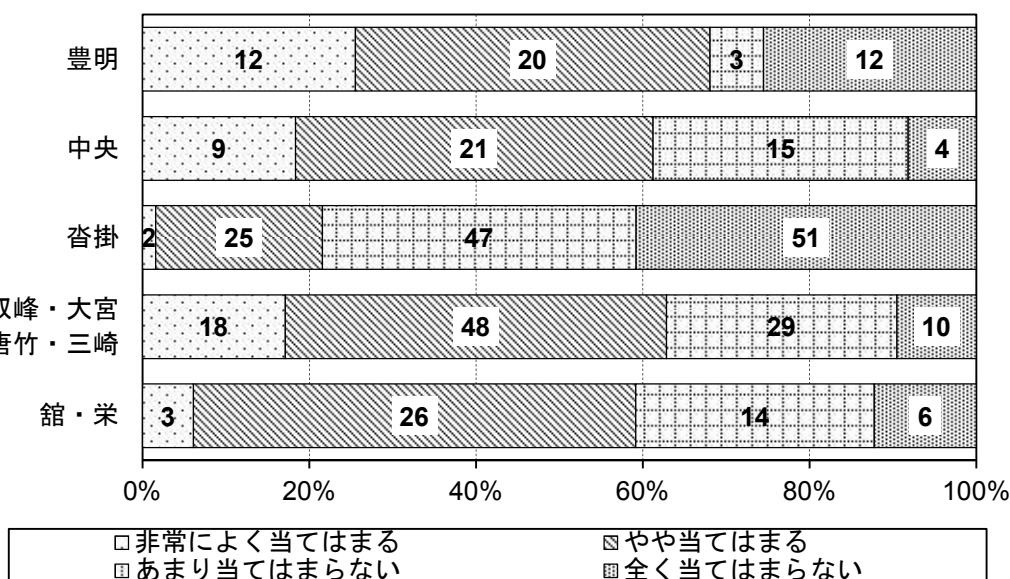


図 2.37 利用しやすい公共交通機関の有無

全体では、非常に満足している回答者は約 1 割と非常に小さい。また、沓掛は約 8 割の回答者が「あまり当てはまらない」・「全く当てはまらない」と評価しており、公共交通機関の不足を評価している。

次に、豊明市の公共施設利用者 1191 人を対象とした公共施設の利用者を対象としたアンケート調査より、施設への移動方法や所用時間から年代ごとの行動範囲を分析する。

年代ごとの公共施設への移動方法を図 2.38 に示す。

移動方法では、どの年代も自家用車の割合が顕著に大きいことが分かる。続いて、徒歩の割合が大きい。若者、高齢者は自家用車の割合が低く、徒歩や自転車、バス等の移動方法の割合が増えることが分かる。

次に、移動の所要時間を図 2.39、自家用車・徒歩で 10 分間の移動可能距離を図 2.40 に示す。

移動の所要時間は、30 代～50 代は 10 分未満の割合が 6 割を占めている。30 代～50 代はどの年代も約 7 割の回答者が、公共施設まで自家用車を利用しており、自家用車の移動可能距離「3～5km＝車 10 分程度」を考慮すると、豊明市内どこからでも公共施設の充実している中心地区にアクセス可能であると考えられる。一方で、60 代以上になると、移動にかかる時間が 10 分以上 30 分未満の割合が 5 割を超える。高齢になるにつれ、自家用車の利用が減少し、移動にかかる時間が長くなるからだと考えられる。特に高齢者にとっての行動範囲は、「80m＝徒歩 1 分程度」を考慮すると、非常に狭くなる可能性がある。つまり、高齢化に対応するため高齢者向けの公共サービスの配置や公共交通機関の検討が必要である。

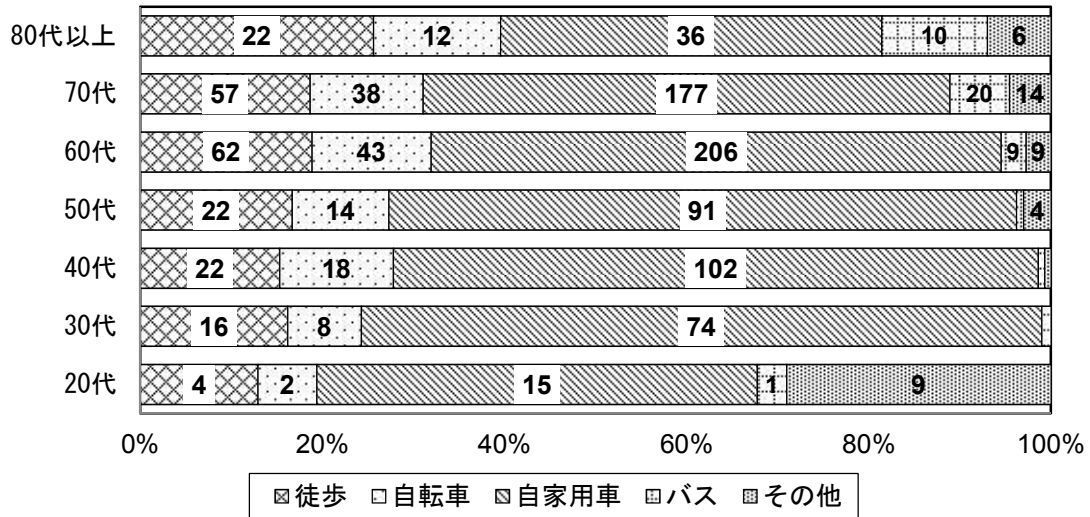


図 2.38 公共施設への移動方法

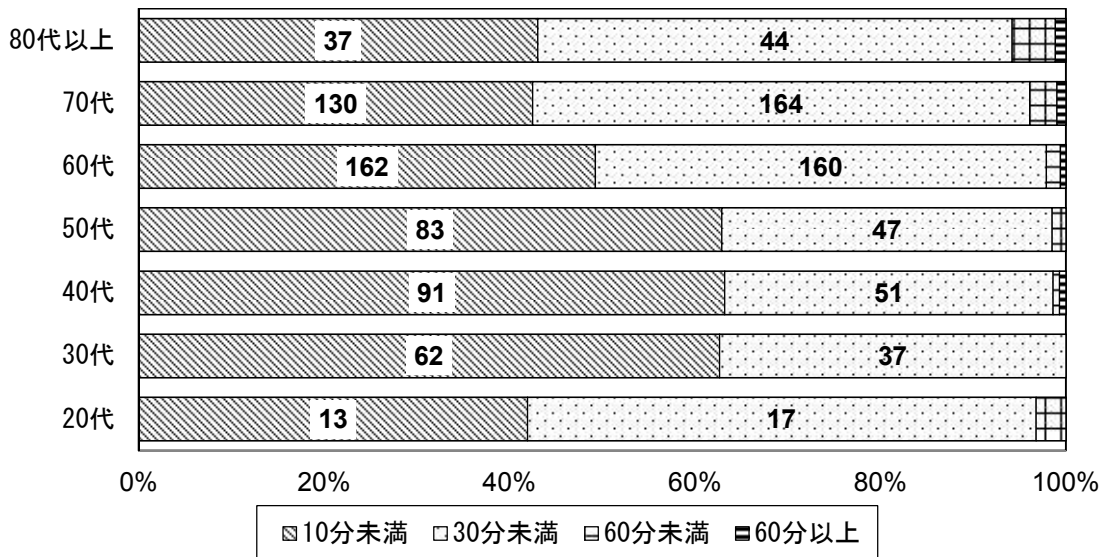


図 2.39 公共施設への移動にかかる所要時間

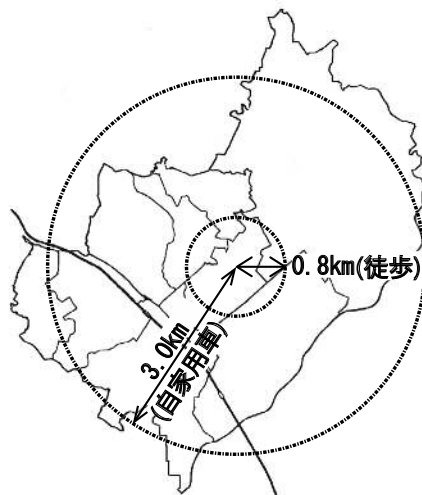


図 2.40 移動可能距離

図 2.41 に各施設別にどの地域から利用しているか分析を行った。すべての施設において、利用者の居住地域がおおよそ均等に分布している。つまり上述のように、利用者の大半が車であるため、施設の距離に依存していないことがわかる。ただし、20代、高齢世帯のように交通弱者と呼ばれる世代はアクセスに検討の余地がある。

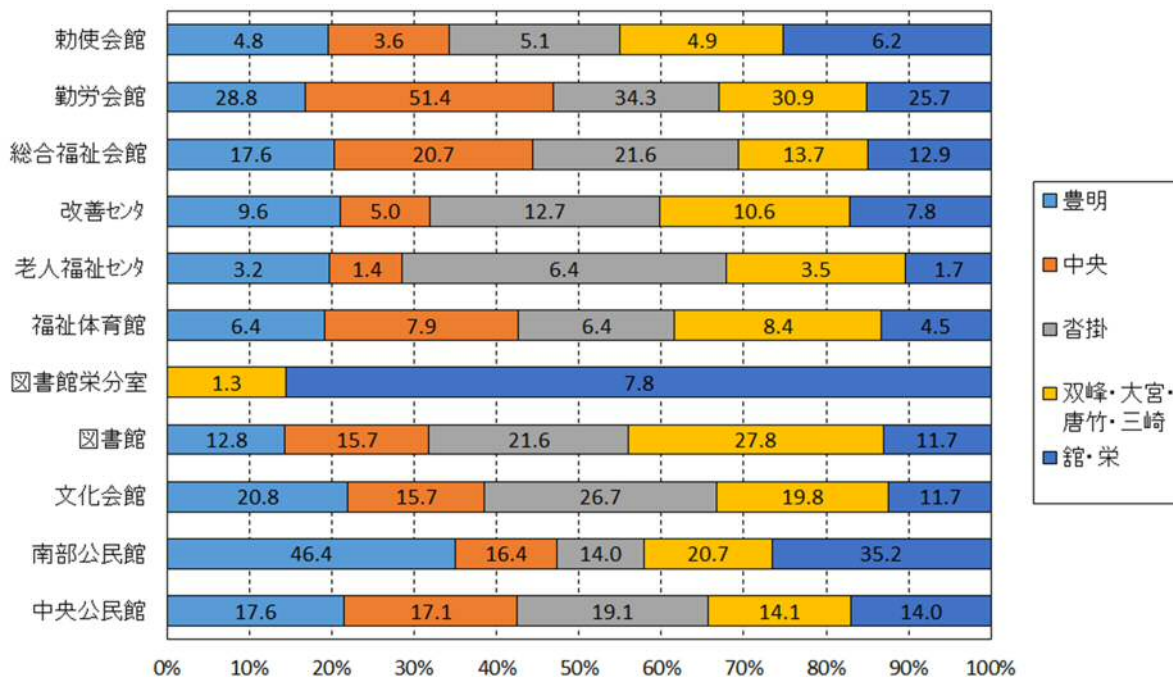


図 2.41 各施設の利用者の居住地区

2.5 公共サービス・施設に対する意識調査

ここでは、アンケート調査の回答を基に、豊明市の抱える公共施設の更新に関する問題に対する意識やどのような公共サービス・施設を求めているのかを分析する。

2.5.1 公共施設問題の意識調査

ここでは、「豊明市では老朽化した公共施設が、近く一斉に更新の時期を迎え、それらの更新費用が市の財政運営にとって大きな負担となるという問題を抱えている」という現状の認知度を「地区別」「年齢別」「性別」に分析する。

まず、「地区別」にこの問題の認知度を図 2.42、「年齢別」に分析したものを図 2.43、「性別」に分析したものを図 2.44 に示す。ただし、年代別では 20 代の回答が少ないため 30 代と合わせて集計した。

公共施設の課題の認知度は、地区毎に大きな差はないことが分かる。一方で、年代別では高齢になるにつれ認知度が高くなる傾向にある。また、性別では女性に比べ男性の方が認知度が約 20% 高いことが分かる。

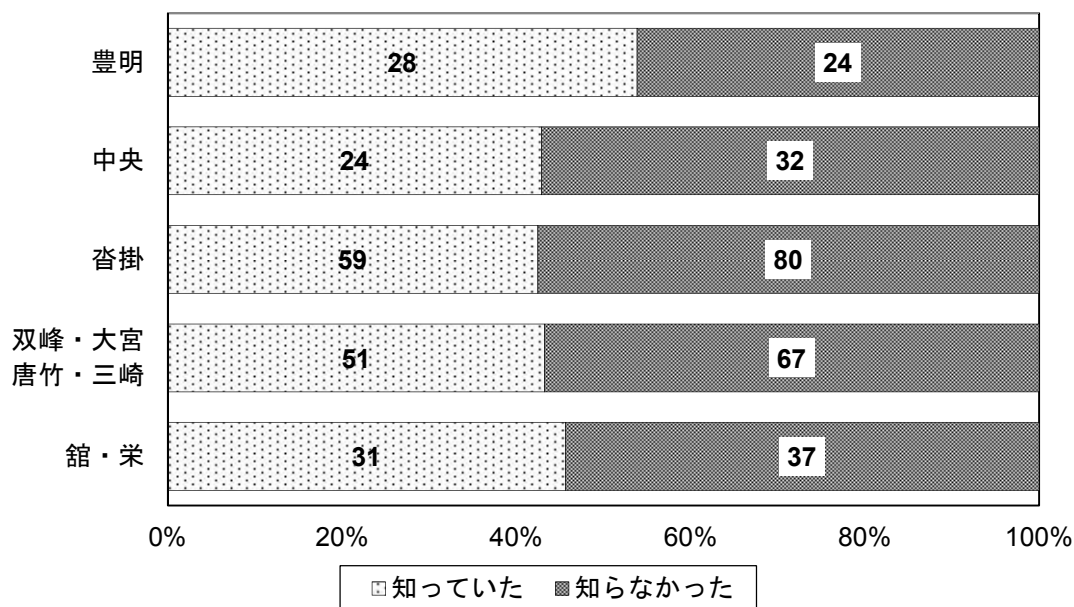


図 2.42 地区別 公共施設更新問題の認知度

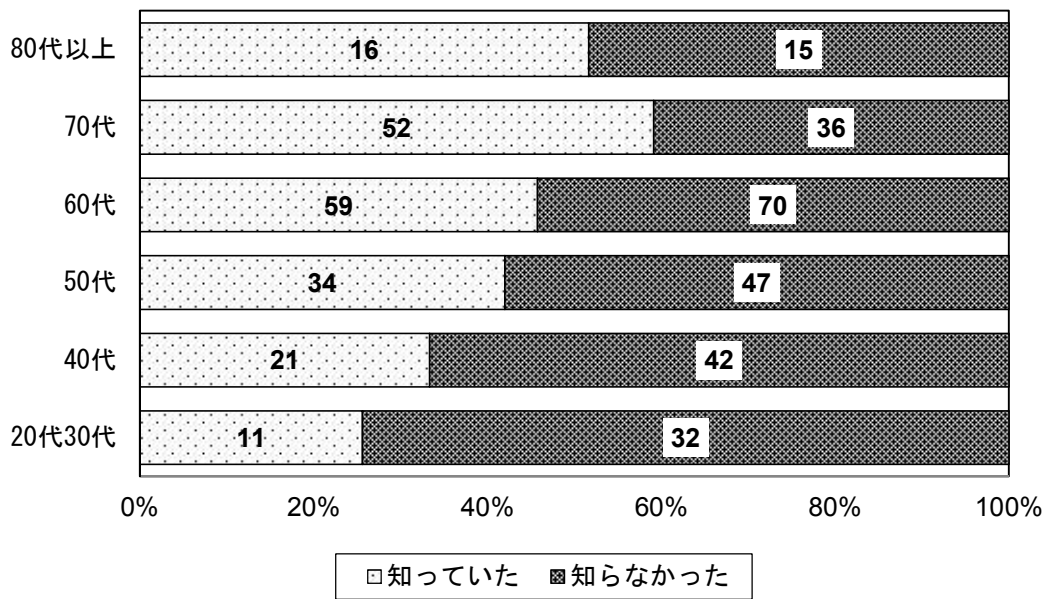


図 2.43 年代別 公共施設更新問題の認知度

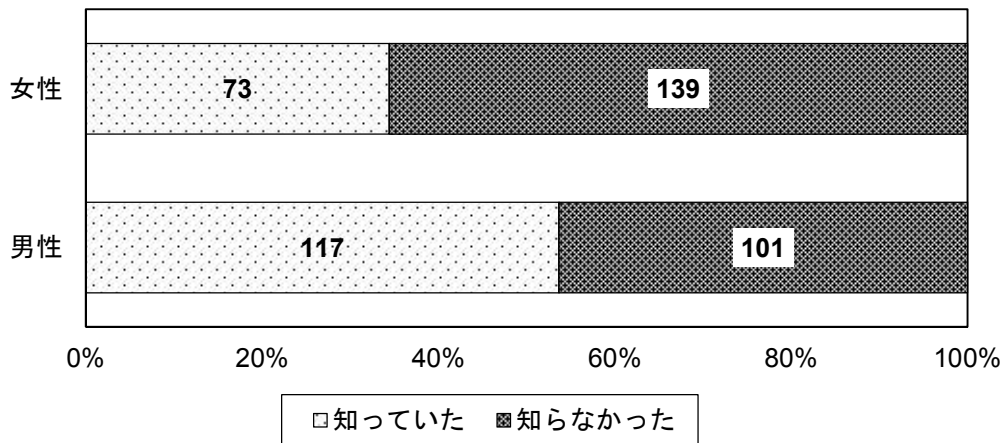


図 2.44 性別 公共施設更新問題の認知度

次に、「年代別」にこの問題への興味の有無を図 2.45、「性別」に分析したものを図 2.46 に示す。これは、この問題を認知していた回答者のみに関心の有無を問う設問である。

年代別では、どの年代も「関心がある」の回答者が非常に多いが、年代毎に特徴は無い。また、性別では女性に比べ男性の方が強く関心を持っている回答者が多いことが分かる。

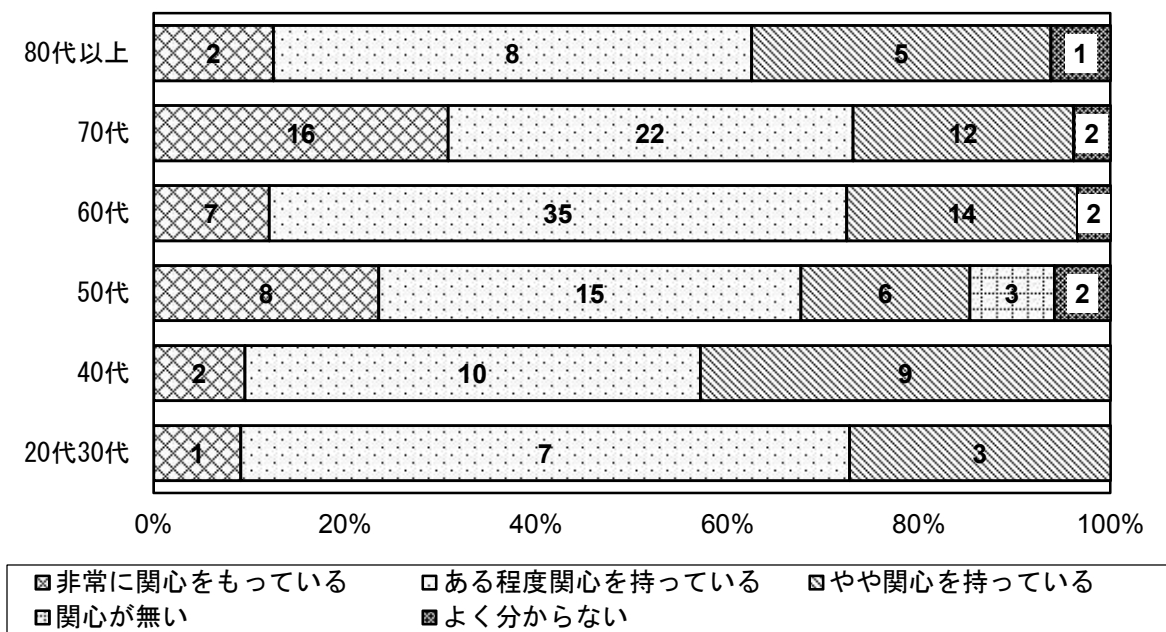


図 2.45 年齢別 公共施設問題への興味の有無

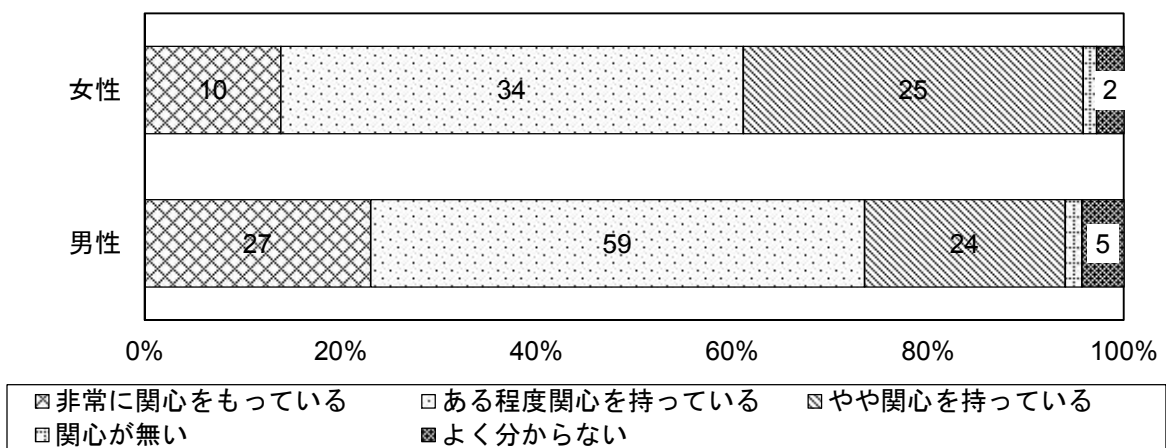


図 2.46 性別 公共施設問題への興味の有無

次に、「年齢別」にこの問題を知った方法を図 2.47 に示す。

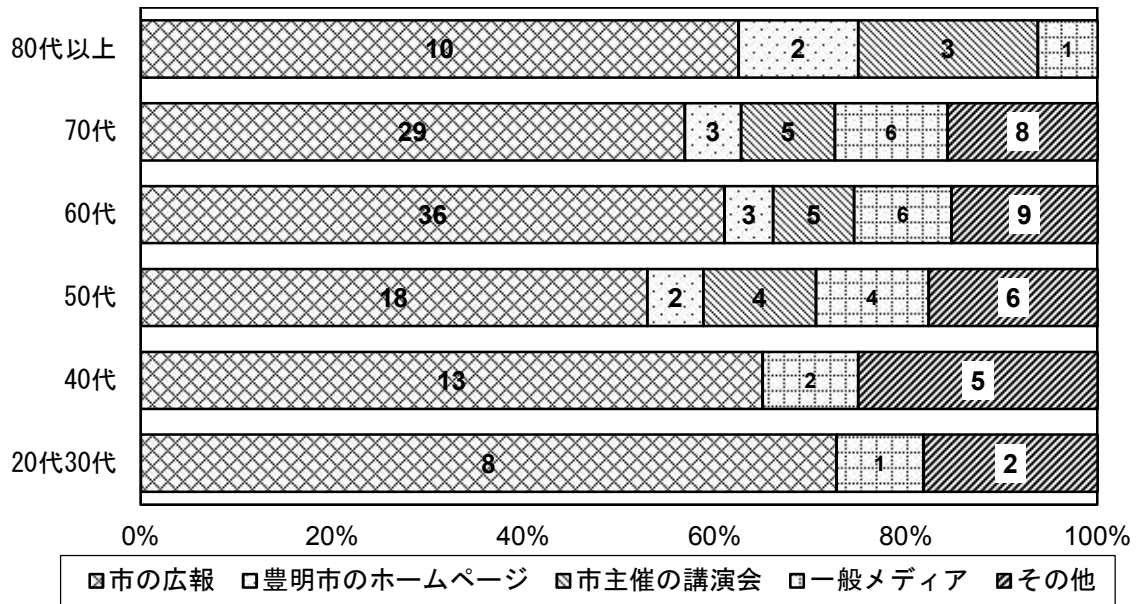


図 2.47 情報を得た方法

どの年代も、市の広報が 50%以上で最も割合が大きい。一方で、豊明市のホームページから情報を得ている回答者は、非常に少ないことが分かった。また、情報を得た方法に、年代毎の差は見られない。

2.5.2 個人の公共サービスに対する需要の分析

ここでは、公共施設の適正配置を進めるにあたり、市民がどのような公共施設を求めているのか、公共サービスに対して何を求めているかを「年代」や「性別」ごとに明らかにすることを目的として、需要の分析をアンケートの回答を基に行った。

まず、「地域の核となる公共施設の姿」に対する考え方を明らかにするため、年代・性別にコレスポネンデンス分析を行った結果を図 2.48 に示す。

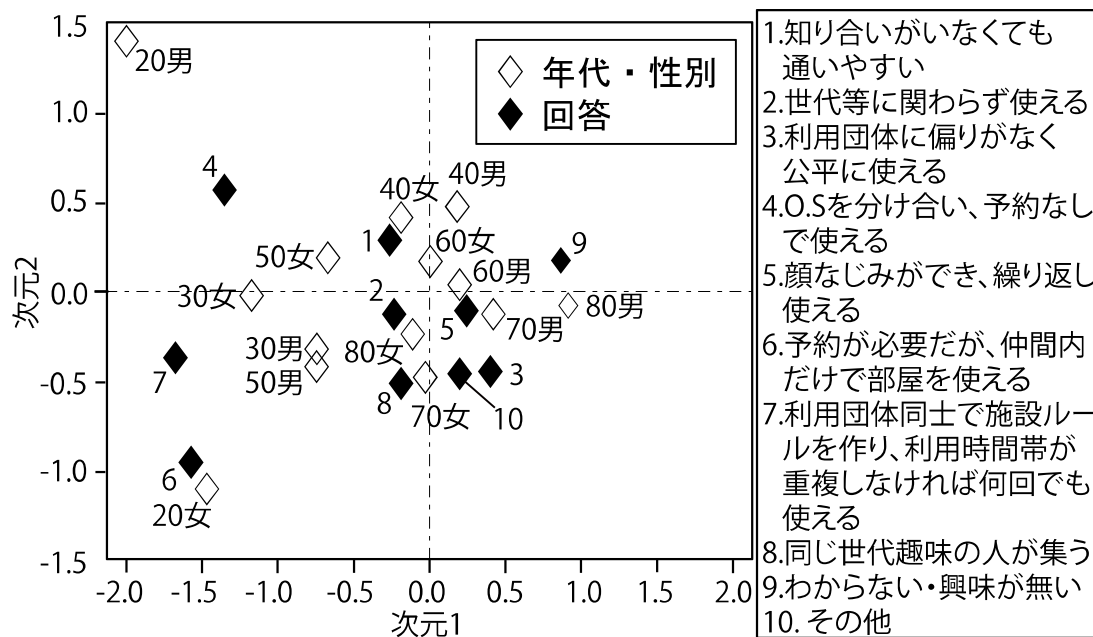


図 2.48 コレスポネンデンス分析結果

また、クラスター分析によりグルーピングした結果を図 2.49、コレスポンデンス分析とクラスター分析をまとめたものを図 2.50 に示す。

グルーピングした結果、(i) 30代 男性・女性、50代 男性・女性 (ii) 20代 女性 (iii) 40代 男性・女性、60代 女性 (iv) 80代 男性 (v) 60代・70代 男性、70代 女性 80代 女性の5つのグループに分類された。20代 男性は、外れ値となった。

(i) (ii) は、仲間内のみで利用する公共施設を求めている。その一方で、(iii) (v) は、知り合いがいなくても様々な人が集い利用することができる公共施設を求めていることが分かる。

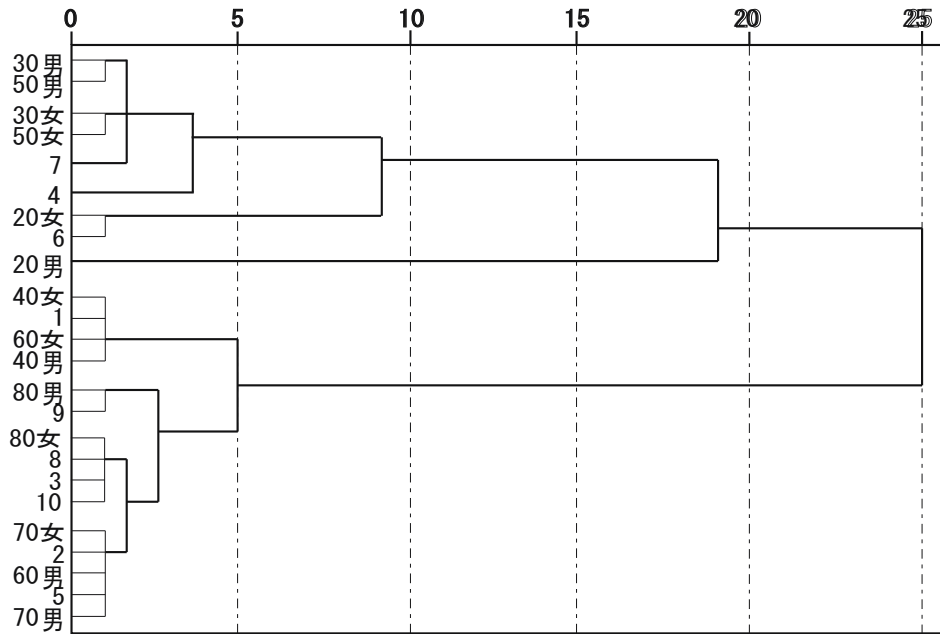


図 2.49 クラスター分析結果

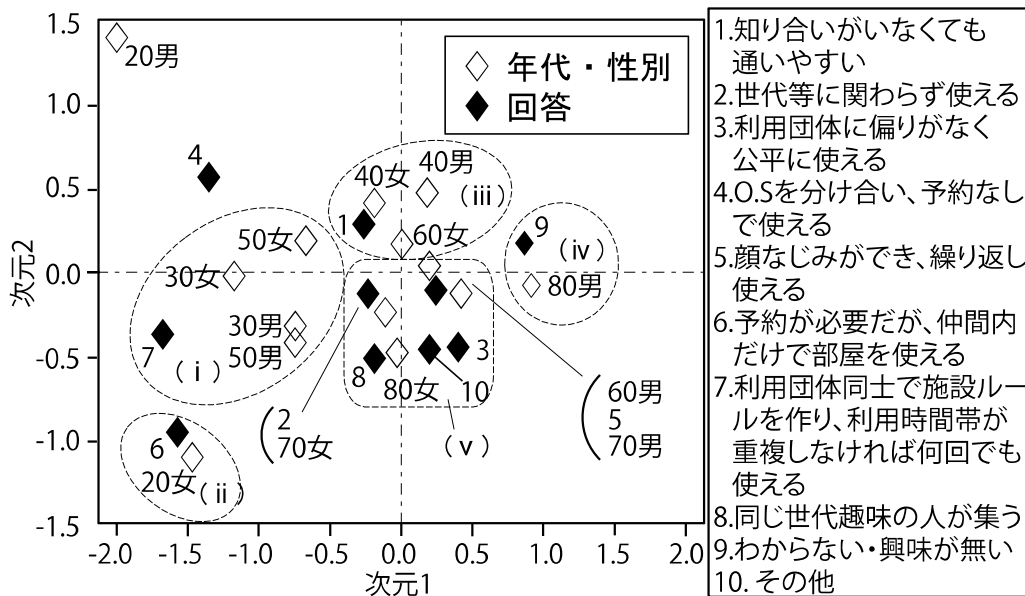


図 2.50 地域の核となる公共施設の姿

次に、年代・性別に関心のある公共サービスとの関係性を明らかにするため、コレスポンド分析を行った結果を図 2.51 に示す。

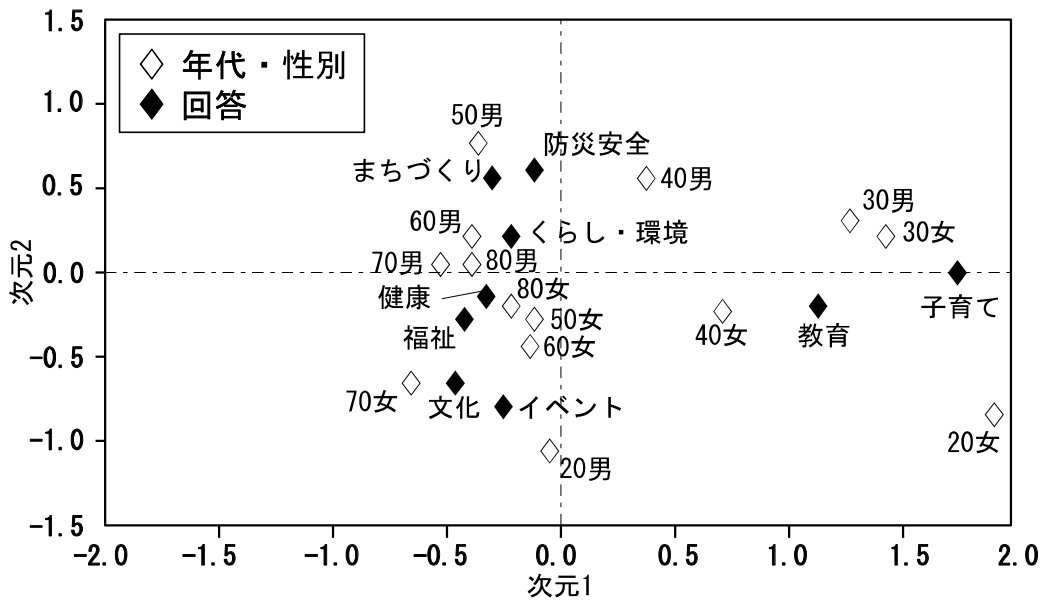


図 2.51 コレスポンド分析結果

また、クラスター分析によりグルーピングした結果を図 2.52 に、コレスポネンシ分析とクラスター分析をまとめたものを図 2.53 に示す。

グルーピングした結果、(i) 40代・50代 男性 (ii) 60代・70代・80代 男性、50代・60代・80代 女性 (iii) 20代 男性、70代 女性 (iv) 40代 女性 (v) 30代 男性・女性の5つのグループに分類された。

(i) 40代・50代男性は、まちづくりや防災安全といった地域との関係が強く、(ii) 60代・70代・80代以上男性、50代・60代・80代以上女性は、暮らし・環境や健康、福祉といった生活に関わりの深い公共サービスとの関係が強い。(iii) 20代男性、70代女性は、イベント・文化といった地域活動との関係が強い。また、(iv) 40代女性は、教育との関係が強く、(v) 30代男性・女性は、子育てとの関係が強い。つまり、今後高齢化が進むにつれて、暮らし・環境や健康、福祉といった生活に関わりの深い公共サービスへの需要が高まると考えられる。

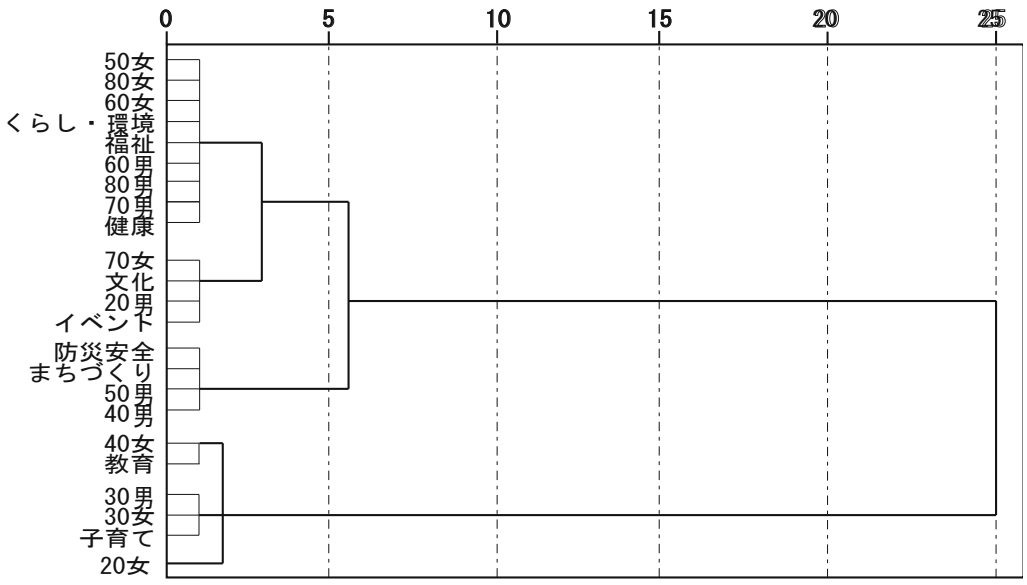


図 2.52 クラスター分析結果

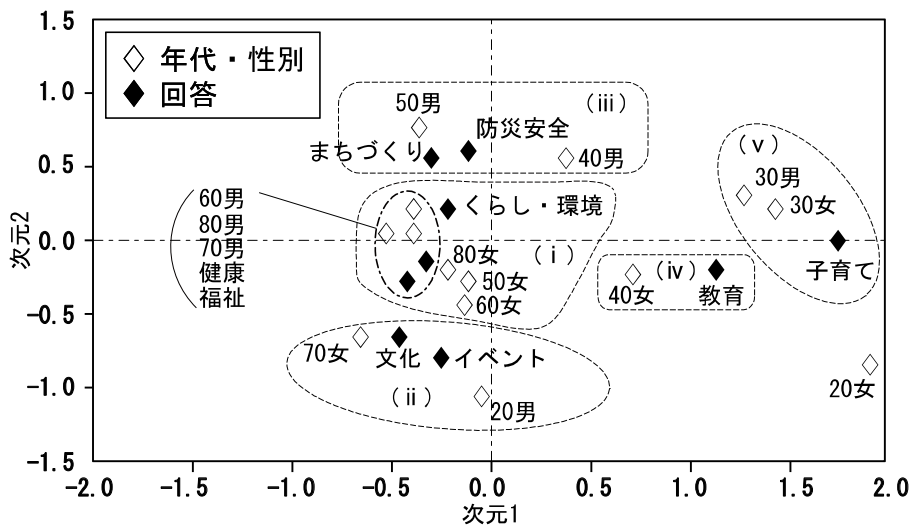


図 2.53 関心のある公共サービス

次に、公共サービスにおいて新たな需要を探ることを目的として、年代・性別にストレスの発散方法の分析を行った。コレスポネンス分析を行った結果を図 2.54 示す。

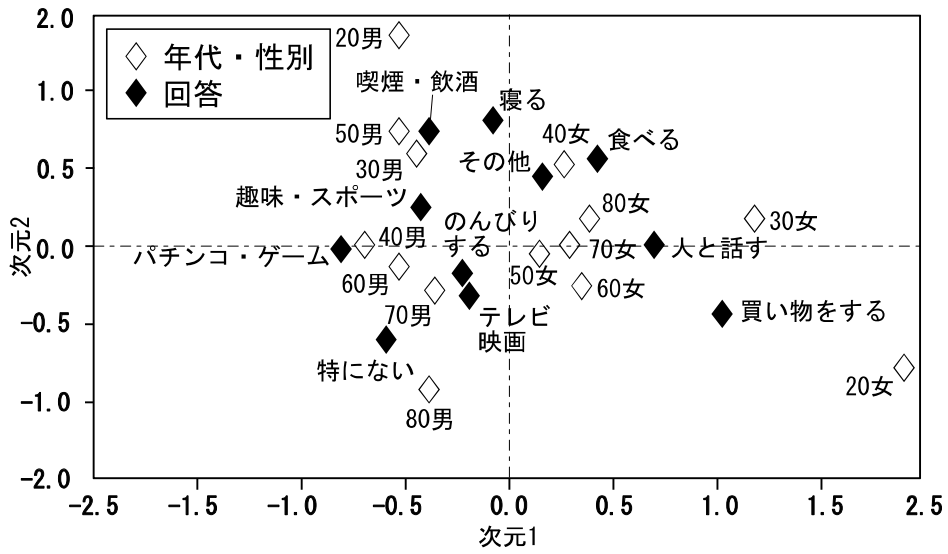


図 2.54 ストレス発散方法

また、クラスター分析によりグルーピングした結果を図 2.55 に、コレスポンデンス分析とクラスター分析をまとめたものを図 2.56 に示す。

(i) 40代・60代 男性 (ii) 70代 男性 (iii) 80代 男性 (iv) 30代・50代 男性 (v) 40代 女性 (vi) 50代・60代・70代・80代 女性 (vii) 30代 女性の7つのグループに分類された。また、20代男女共に外れ値となった。

(i) 40代・60代 男性は、趣味・スポーツやパチンコ等と関係が強い。(ii) 70代 男性は、テレビ・映画やのんびりする、(iii) 80代 男性は、特に発散方法は無いとの関係が強い。(iv) 30代・50代男性は、喫煙・飲酒や寝ると関係が強い。(v) 40代女性は、食べると関係が強い。また、(vi) 50代・60代・70代・80代 女性は人と話す、(vii) 30代 女性は、買い物と関係が強いという結果になった。年齢の高い女性は、人と話してストレス発散していることが分かる。

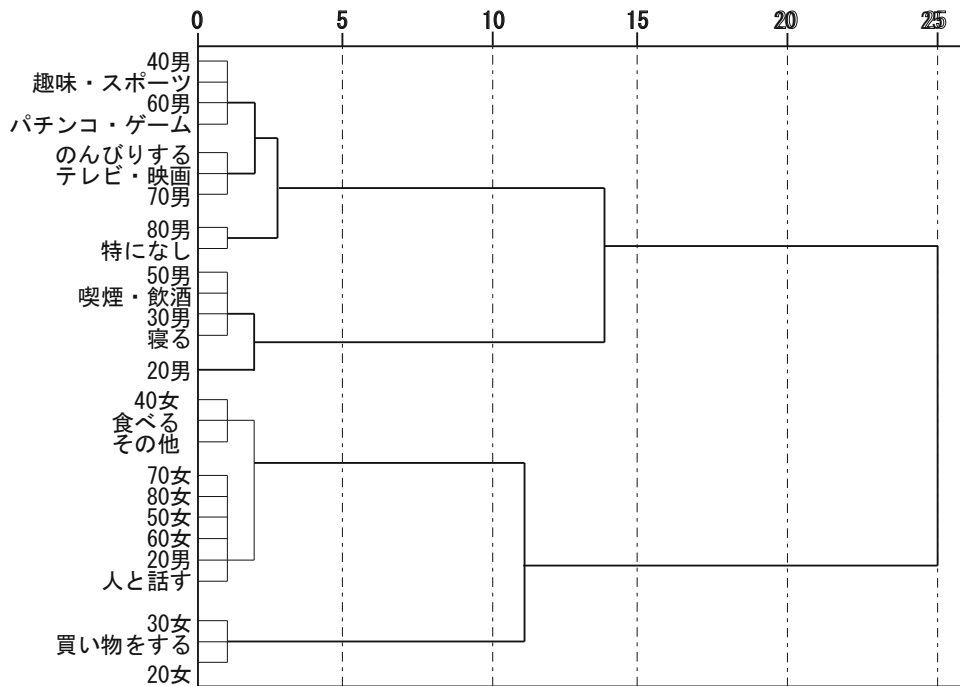


図 2.55 クラスタ分析

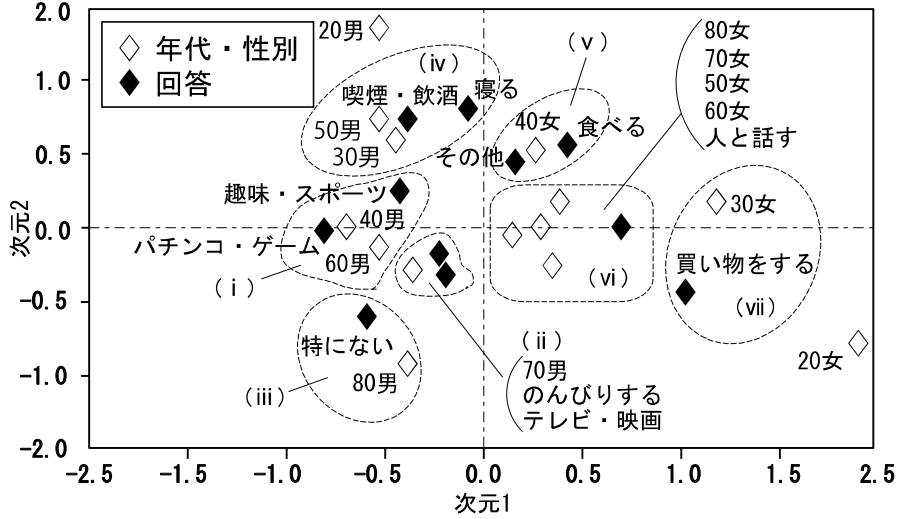


図 2.56 年代・性別 ストレスの発散方法

2.6 まとめ

公共サービスの需要を検討することを目的に、豊明市民を対象としたアンケート調査を行った。

- ・子育て世代 [30、40代 (主に女性)] のためのサービス
 - －興味 : 学校・子育て関係の施設
 - －生活圏 : 学校・子育て関係施設中心、市役所の利用率が高い
車の利用率の最も高い世代で、比較的行動範囲は広い
 - －趣味 : 買い物や食事等で発散
 - －今後の動向 : 年少人口減少とともに縮小

- ・働く世代 [20～60代]・男性のためのサービス
 - －興味 : 防災・安全やまちづくり等地域の自治に興味
 - －生活圏 : 駅や職場と関わりが強く、市外の活動が中心
車の利用率の高い世代で、行動範囲が広い
 - －趣味 : スポーツ、飲酒・喫煙など
 - －今後の動向 : 生産年齢人口減少とともにスポーツ施設の需要減少
- ・働く世代 [20～60代]・女性のためのサービス
 - －興味 : 暮らし・環境に興味
 - －生活圏 : 生活圏から市外まで幅広い
車の利用率の高い世代で、行動範囲が広い
 - －趣味 : 買い物、食事、人との会話など

- ・高齢世代 [60代以上] のためのサービス
 - －興味 : 健康・福祉、暮らし・環境、文化
 - －生活圏 : 近所の生活必要施設中心となるが、年齢が上ると、病院・福祉、文化・学習施設中心
車の利用率が減少していくため、行動範囲が狭くなる
 - －趣味 : 男性は内向き、女性は外向き
 - －今後の動向 : 健康・福祉、暮らし・環境、文化の需要は続く
高齢者の生活圏内にこれらの施設が必要
施設の維持が困難な場合、学校の活用または、交通サービスの拡充が必要